Sun N1 Service Provisioning System ユーザーズガイドおよびリリースノート(WebLogic 8 Plug-In 2.0)

Sun Microsystems, Inc.
4150 Network Circle
Santa Clara, CA 95054
U.S.A.

Part No: 819–4233–10
2005 年 9 月

Copyright 2005 Sun Microsystems, Inc. 4150 Network Circle, Santa Clara, CA 95054 U.S.A. All rights reserved.

本製品およびそれに関連する文書は著作権法により保護されており、その使用、複製、頒布および逆コンパイルを制限するライセンスのもとにおいて頒布されます。サン・マイクロシステムズ株式会社の書面による事前の許可なく、本製品および関連する文書のいかなる部分も、いかなる方法によっても複製することが禁じられます。

本製品の一部は、カリフォルニア大学からライセンスされている Berkeley BSD システムに基づいていることがあります。UNIX は、X/Open Company, Ltd. が独占的にライセンスしている米国ならびに他の国における登録商標です。フォント技術を含む第三者のソフトウェアは、著作権により保護されており、提供者からライセンスを受けているものです。

U.S. Government Rights Commercial software. Government users are subject to the Sun Microsystems, Inc. standard license agreement and applicable provisions of the FAR and its supplements.

本製品に含まれる HG-MinchoL、HG-MinchoL-Sun、HG-PMinchoL-Sun、HG-GothicB、HG-GothicB-Sun、および HG-PGothicB-Sun は、株式会社リコーがリョービイマジクス株式会社からライセンス供与されたタイプフェースマスタをもとに作成されたものです。 HeiseiMin-W3H は、株式会社リコーが財団法人日本規格協会からライセンス供与されたタイプフェースマスタをもとに作成されたものです。フォントとして無断複製することは禁止されています。

Sun、Sun Microsystems、docs.sun.com、AnswerBook、AnswerBook2 は、米国およびその他の国における米国 Sun Microsystems, Inc. (以下、米国 Sun Microsystems 社とします) の商標、登録商標もしくは、サービスマークです。

サンのロゴマークおよび Solaris は、米国 Sun Microsystems 社の登録商標です。

すべての SPARC 商標は、米国 SPARC International, Inc. のライセンスを受けて使用している同社の米国およびその他の国における商標または登録商標です。SPARC 商標が付いた製品は、米国 Sun Microsystems 社が開発したアーキテクチャーに基づくものです。

OPENLOOK、OpenBoot、JLE は、サン・マイクロシステムズ株式会社の登録商標です。

Wnn は、京都大学、株式会社アステック、オムロン株式会社で共同開発されたソフトウェアです。

Wnn6 は、オムロン株式会社、オムロンソフトウェア株式会社で共同開発されたソフトウェアです。©Copyright OMRON Co., Ltd. 1995-2000. All Rights Reserved. ©Copyright OMRON SOFTWARE Co.,Ltd. 1995-2002 All Rights Reserved.

「ATOK」は、株式会社ジャストシステムの登録商標です。

「ATOK Server/ATOK12」は、株式会社ジャストシステムの著作物であり、「ATOK Server/ATOK12」にかかる著作権その他の権利は、株式会社ジャストシステムおよび各権利者に帰属します。

「ATOK Server/ATOK12」に含まれる郵便番号辞書 (7 桁/5 桁) は日本郵政公社が公開したデータを元に制作された物です (一部データの加工を行なっています)。

「ATOK Server/ATOK12」に含まれるフェイスマーク辞書は、株式会社ビレッジセンターの許諾のもと、同社が発行する『インターネット・パソコン通信フェイスマークガイド』に添付のものを使用しています。

Unicode は、Unicode, Inc. の商標です。

本書で参照されている製品やサービスに関しては、該当する会社または組織に直接お問い合わせください。

OPEN LOOK および Sun Graphical User Interface は、米国 Sun Microsystems 社が自社のユーザーおよびライセンス実施権者向けに開発しました。米国 Sun Microsystems 社は、コンピュータ産業用のビジュアルまたはグラフィカル・ユーザーインタフェースの概念の研究開発における米国 Xerox 社の先駆者としての成果を認めるものです。 米国 Sun Microsystems 社は米国 Xerox 社から Xerox Graphical User Interface の非独占的ライセンスを取得しており、このライセンスは、OPEN LOOK のグラフィカル・ユーザーインタフェースを実装するか、またはその他の方法で米国 Sun Microsystems 社との書面によるライセンス契約を遵守する、米国 Sun Microsystems 社のライセンス実施権者にも適用されます。

本書は、「現状のまま」をベースとして提供され、商品性、特定目的への適合性または第三者の権利の非侵害の黙示の保証を含みそれに限定されない、明示的であるか黙示的であるかを問わない、なんらの保証も行われないものとします。

本製品が、外国為替および外国貿易管理法 (外為法) に定められる戦略物資等 (貨物または役務) に該当する場合、本製品を輸出または日本国外へ持ち出す際には、サン・マイクロシステムズ株式会社の事前の書面による承諾を得ることのほか、外為法および関連法規に基づく輸出手続き、また場合によっては、米国商務省または米国所轄官庁の許可を得ることが必要です。

原典: Sun N1 Service Provisioning System User’s Guide and Release Notes for the WebLogic 8 Plug-In 2.0

Part No: 819-2903–10

Revision A





051017@13215

目次

はじめに　**9**

1　WebLogic 8 プラグインの概要　13
WebLogic 8 プラグインの目的　13
WebLogic 8 プラグインの内容　13
WebLogic 8 プラグインを使用するための要件　14

2　WebLogic 8 プラグインのリリースノート　17
インストール上の問題　17
実行時の問題　17

3　WebLogic 8 プラグインのインストールと構成　19
WebLogic 8 プラグインの入手　19
WebLogic 8 プラグインの Sun N1 Service Provisioning System への追加　20
▼ ブラウザインタフェースを使用して WebLogic 8 プラグインをインポートする　20
▼ CLI を使用して WebLogic 8 プラグインをインポートする　20
▼ WebLogic ソフトウェアをインストールする　21
アップグレード関連の注意事項　23
▼ 旧バージョンのコンポーネントにアクセスする　24

4　WebLogic 8 プラグインの使用法　25
Sun N1 Service Provisioning System を使用した WebLogic 8 環境のインストール法および使用法　25
プラグインの規定　25

グローバルな必要条件 26
処理の概要 27
WebLogic インフラストラクチャーの作成 28
▼ WebLogic 8 ドメインと管理サーバーを作成する 29
▼ 異なるパスワードを使用して複数のドメインを作成する 31
▼ WebLogic 管理対象サーバーを作成する 32
▼ ライセンスコンポーネントを作成する 35
▼ ライセンスコンポーネントをインストールする 35
▼ WebLogic クラスタを作成する 36
▼ クラスタメンバーを作成する 38
WebLogic ドメイン、サーバー、およびクラスタの管理 40
WebLogic ドメインと管理サーバーの管理 40
▼ WebLogic ドメインと管理サーバーを削除する 40
WebLogic クラスタの管理 42
▼ クラスタを起動または停止する 42
▼ WebLogic クラスタを削除する 42
▼ WebLogic クラスタメンバーを削除する 43
WebLogic 管理対象サーバーの管理 44
▼ 管理対象サーバーを起動する 44
▼ 管理対象サーバーを停止する 45
▼ 管理対象サーバーを削除する 46
▼ 管理対象サーバーに追加 CLASSPATH 要素を追加する 46
WebLogic アプリケーションの取得と編集 47
▼ WebLogic エンタープライズアプリケーションまたは EAR ファイルを取得する 47
▼ WebLogic Web アプリケーションまたは WAR ファイルを取得する 48
▼ WebLogic JAR ファイルを取得する 49
コンポーネントタイプを使用した WebLogic アプリケーションの配備 50
エンタープライズアプリケーション (EAR) コンポーネントタイプ 51
Web アプリケーション (WAR) コンポーネントタイプ 52
EJB コンポーネントタイプを含む Java アーカイブファイル 54
データソースおよびトランザクションデータソースのコンポーネントタイプ 55
接続プールのコンポーネントタイプ 56
マルチプールコンポーネントタイプ 57
スレッドプールコンポーネントタイプ 58
トランザクションサービスコンポーネントタイプ 58
JMS Server コンポーネントタイプ 59
メールセッションコンポーネントタイプ 60

CLI を使用した WebLogic の作業　60
Sun N1 Service Provisioning System コマンド行インタフェースの使用法　61
WebLogic コマンド行インタフェースの使用法　61
▼ Sun N1 Service Provisioning System を介して WebLogic コマンド行インタフェースを使用する　61
Sun N1 Service Provisioning System 内での WebLogic Server Scripting Tool の使用法　63
▼ WebLogic スクリプトコンポーネントを作成する　63
▼ WebLogic スクリプトコンポーネントをインストールする　64
プランの使用法　65
障害追跡　65
WebLogic のインストールのエラーメッセージの例　65

索引　**67**

表目次

表 1–1　JRE の要件　15
表 1–2　WebLogic インストールメディアの要件　15
表 4–1　共通のタスク名　26
表 4–2　WebLogic エンタープライズアプリケーションのエラー状態　52
表 4–3　WebLogic Web アプリケーションのエラー状態　53
表 4–4　WebLogic EJB コンテナのエラー状態　55

はじめに

このマニュアルでは、N1™ Service Provisioning System ソフトウェアを使用して次の作業を行う方法について説明します。

- WebLogic 8 ソフトウェアのインストールとインフラストラクチャーコンポーネントの構成
- WebLogic へのアプリケーションの配備
- WebLogic 環境の構成

対象読者

このマニュアルの主な対象読者は、BEA WebLogic 8 の機能を Sun N1 Service Provisioning System ソフトウェアに組み込む、Sun N1 Service Provisioning System ソフトウェアのシステム管理者およびオペレータです。このようなユーザーは、次の内容に関する十分な知識があると想定されています。

- Sun N1 Service Provisioning System 製品
- 標準的な UNIX® と Windows のコマンドとユーティリティー
- BEA WebLogic 8 製品で使用できる一般的な概念と管理機能

お読みになる前に

Sun N1 Service Provisioning System ソフトウェアの使用法に関する十分な知識がないユーザーは、次のマニュアルを参照してください。

- 『Sun N1 Service Provisioning System 5.1 システム管理者ガイド』

- 『Sun N1 Service Provisioning System 5.1 オペレーションとプロビジョニングガイド』

内容の紹介

第 1 章では、プラグインソリューションの概要を説明します。

第 2 章では、インストールと実行時の問題について説明します。

第 3 章では、プラグインのインストールおよび構成の方法について説明します。

第 4 章では、プラグインを介したアプリケーションとファイルの取得および配備の方法を説明し、プラグインに付属する特定のコンポーネントタイプについて説明します。

第三者の関連 Web サイト

このマニュアル内で参照している第三者の URL は、追加の関連情報を提供します。

BEA WebLogic 8 製品ドキュメントについては、
`http://e-docs.bea.com/platform/docs81/` を参照してください。

注 – このマニュアル内で引用する第三者の Web サイトの可用性について Sun は責任を負いません。Sun は、これらのサイトあるいはリソースに関する、あるいはこれらのサイト、リソースから利用可能であるコンテンツ、広告、製品、あるいは資料に関して一切の責任を負いません。こうしたサイトやリソース上で、またはこれらを経由して利用できるコンテンツ、製品、サービスを利用または信頼したことに伴って発生した (あるいは発生したと主張される) 実際の (あるいは主張される) 損害や損失についても、Sun は一切の責任を負いません。

マニュアル、サポート、およびトレーニング

Sun のサービス	**URL**	内容
マニュアル	`http://jp.sun.com/documentation/`	PDF 文書および HTML 文書をダウンロードできます。
サポートおよびトレーニング	`http://jp.sun.com/supportraining/`	技術サポート、パッチのダウンロード、および Sun のトレーニングコース情報を提供します。

表記上の規則

このマニュアルでは、次のような字体や記号を特別な意味を持つものとして使用します。

表 **P–1** 表記上の規則

字体または記号	意味	例
`AaBbCc123`	コマンド名、ファイル名、ディレクトリ名、画面上のコンピュータ出力、コード例を示します。	`.login` ファイルを編集します。 `ls -a` を使用してすべてのファイルを表示します。 `system%`
`AaBbCc123`	ユーザーが入力する文字を、画面上のコンピュータ出力と区別して示します。	`system%` **`su`** `password:`
AaBbCc123	変数を示します。実際に使用する特定の名前または値で置き換えます。	ファイルを削除するには、`rm` *filename* と入力します。
『 』	参照する書名を示します。	『コードマネージャー・ユーザーズガイド』を参照してください。

表 **P–1** 表記上の規則　*(続き)*

字体または記号	意味	例
「 」	参照する章、節、ボタンやメニュー名、強調する単語を示します。	第 5 章「衝突の回避」を参照してください。 この操作ができるのは、「スーパーユーザー」だけです。
\	枠で囲まれたコード例で、テキストがページ行幅を超える場合に、継続を示します。	`sun% grep '^#define \` `XV_VERSION_STRING'`

コード例は次のように表示されます。

- C シェル

  `machine_name% command y|n [filename]`

- C シェルのスーパーユーザー

  `machine_name# command y|n [filename]`

- Bourne シェルおよび Korn シェル

  `$ command y|n [filename]`

- Bourne シェルおよび Korn シェルのスーパーユーザー

  `# command y|n [filename]`

[ ] は省略可能な項目を示します。上記の例は、*filename* は省略してもよいことを示しています。

| は区切り文字 (セパレータ) です。この文字で分割されている引数のうち 1 つだけを指定します。

キーボードのキー名は英文で、頭文字を大文字で示します (例: Shift キーを押します)。ただし、キーボードによっては Enter キーが Return キーの動作をします。

ダッシュ (-) は 2 つのキーを同時に押すことを示します。たとえば、Ctrl-D は Control キーを押したまま D キーを押すことを意味します。

第 1 章

WebLogic 8 プラグインの概要

この章では、Sun N1 Service Provisioning System を使用した BEA WebLogic 8 アプリケーションのプロビジョニングに関する一般的な情報を説明します。この章では、次の内容について説明します。

- 13 ページの「WebLogic 8 プラグインの目的」
- 13 ページの「WebLogic 8 プラグインの内容」
- 14 ページの「WebLogic 8 プラグインを使用するための要件」

WebLogic 8 プラグインの目的

Sun N1 Service Provisioning System ソフトウェアは、BEA WebLogic 8 アプリケーションをサポートする高度な機能を提供します。プロビジョニングソフトウェアを使用してドメイン、管理対象サーバーおよびクラスタをインストールすることにより、WebLogic 8 インフラストラクチャーをプロビジョンニングできます。いったんインストールすれば、管理対象サーバーとドメインを起動/停止することにより、WebLogic 環境を管理できます。また、既存のアプリケーションをブラウズして、以前にインストールしたアプリケーションを取得したり、企業全体にこれらのアプリケーションを配備することもできます。

WebLogic 8 プラグインの内容

WebLogic 8 プラグインには、WebLogic Enterprise アプリケーション、Enterprise JavaBeans™ (EJB™) 技術アプリケーション、および Web アプリケーションの取得、構成、配備を簡易化する定義済みコンポーネントとリソースファイルのほかに、WebLogic 固有のコンポーネントタイプがいくつか含まれます。これらのコンポーネントタイプは次の 3 つのファミリに分類できます。

- WebLogic ソフトウェアをインストールするコンポーネント
- WebLogic サービスをサポートするコンポーネント:
  - WebLogic 管理サーバー
  - WebLogic 管理対象サーバー
  - WebLogic クラスタ
- エンタープライズアプリケーション、Web アプリケーション、および Java アーカイブファイルをインストールするためのプラン。
- WebLogic 8 アプリケーションサーバー上で配備を行うため、アプリケーションを配備および取得する特別なコンポーネント
- WebLogic 8 サービスを構成する特別なコンポーネントタイプ。
  - ライセンス – WebLogic ライセンスを配備できるようにする。
  - スレッドプール – スレッドプール構成を編集および配備できるようにする。
  - データソース – データソースを取得、編集、および配備できるようにする。
  - トランザクションデータソース – データソースを取得、編集、および配備できるようにする。
  - JMS サーバー – JMS サーバーを取得、編集、および配備できるようにする。
  - 接続プール – 接続プールを取得、編集、および配備できるようにする。
  - マルチプール – マルチプールを取得、編集、および配備できるようにする。
  - トランザクションサービス – トランザクションサービスを編集できるようにする。
  - WLScript – プロビジョニングシステムのインタフェース経由で WebLogic コマンドを実行できるようにする。

WebLogic 8 プラグインには、WebLogic 管理サーバー、管理対象サーバー、およびクラスタをインストールおよび削除するいくつかのプランも含まれています。

WebLogic 8 プラグインを使用するための要件

WebLogic 8 プラグインは、次のプラットフォームの WebLogic Server Version 8.1 をサポートしています。

- SPARC 版 Solaris 8
- SPARC 版 Solaris 9
- x86 版 Solaris 9
- RedHat Linux AS 2.1
- RedHat Linux AS 3.0
- AIX 5.1 および 5.2

WebLogic 8 プラグインの配備先ホストは、次の要件を満たす必要があります。これらの要件は、インストールに関する最低限の必要条件です。

ディスク容量	UNIX システムでは、インストールされる製品には約 375M バイトの空きディスク容量が必要です。 `/var/tmp` ディレクトリには、インストーラにより約 1G バイトの一時ディスク容量が必要です。/var/tmp フォルダに空き容量が存在しない場合、`altTempDir` コンポーネント変数を使用して別の一時ディレクトリを作成します。詳細については、21 ページの「WebLogic ソフトウェアをインストールする」を参照してください。
RAM	512M バイト (最低限)、1G バイト (推奨)
Java run-time environment (JRE)	WebLogic Server のインストールプログラムは、実行に JRE が必要です。次の要件は、サポートされる構成の BEA のリストから要約したものです。詳細なリストについては、BEA's WebLogic 8.1 product documentation websiteを参照してください。

表 **1–1** JRE の要件

	すでにインストールされている **Java SDK**	インストールに含まれる
AIX	IBM SDK 1.4.2	
RedHat Linux		WebLogic JRockit 1.4.2_04 SDK
Solaris x86	Sun Java 2 SDK 1.4.2_04	
Solaris SPARC		Sun Java SDK 1.4.2_04

表 **1–2** WebLogic インストールメディアの要件

	バイナリインストーラ	**JAR** インストーラ	補助 **JAR** ファイル
AIX		X	
RedHat Linux	X		
Solaris x86		X	X
Solaris SPARC	X		

インストールされるアプリケーションに応じて、構成には追加リソースが必要となる場合があります。BEA の WebLogic の要件については、Web ページ「`WebLogic Platform 8.1 Supported Configurations`」

第 2 章

WebLogic 8 プラグインのリリースノート

この章では、WebLogic 8 プラグインについての最新情報と既知の問題点について説明します。この章では、次の内容について説明します。

- 17 ページの「インストール上の問題」
- 17 ページの「実行時の問題」

インストール上の問題

インストールに関する問題はありません。

実行時の問題

実行時に起きることが判明している問題はありません。

第 3 章

WebLogic 8 プラグインのインストールと構成

この章では、WebLogic 8 プラグインをインストールおよび構成する方法について説明します。この章では、次の内容について説明します。

- 19 ページの「WebLogic 8 プラグインの入手」
- 20 ページの「WebLogic 8 プラグインの Sun N1 Service Provisioning System への追加」
- 23 ページの「アップグレード関連の注意事項」

WebLogic 8 プラグインの入手

BEA WebLogic プラグインは、Sun N1 Service Provisioning System ソフトウェアのプラグインとしてパッケージ化されています。プラグインは、Java™ Archive (JAR) ファイルにパッケージ化されています。BEA WebLogic プラグインのプラグインファイルは、Sun N1 Service Provisioning System Supplement CD または Sun Download Center から入手できます。

WebLogic 8 プラグインは、2 つの異なる JAR ファイルからインポートして入手できます。状況に応じて、適切なファイルを選択してください。

- WebLogic 8 プラグインを初めてインポートする場合は、`com.sun.weblogic8_2.0.jar` ファイルを入手してください。
- WebLogic 8 プラグインの旧バージョンをすでにインポートしてある場合は、`com.sun.weblogic8_1.0_2.0.jar` ファイルを入手してください。

WebLogic 8 プラグインの Sun N1 Service Provisioning System への追加

特定のプラグインを Sun N1 Service Provisioning System 製品に認識させるには、そのプラグインをマスターサーバーにインポートする必要があります。プラグインのインポートを行う場合は、『Sun N1 Service Provisioning System 5.1 システム管理者ガイド』の第 5 章「プラグインの管理」に記載された手順を参照してください。

▼ ブラウザインタフェースを使用して WebLogic 8 プラグインをインポートする

プラグインのインポートまたはアップグレードは次の手順で行います。詳細は、『Sun N1 Service Provisioning System 5.1 システム管理者ガイド』の第 5 章「プラグインの管理」を参照してください。

手順

1. ブラウザインタフェースのメインウィンドウの「**Administrative**」セクションで、「**Plug-ins**」をクリックします。
2. 「**Plug-ins**」ページの「**Action**」列で「**Import**」をクリックします。
3. **JAR** ファイルをダウンロードした場所に移動します。
   - WebLogic 8 プラグインを初めてインポートする場合は、`com.sun.weblogic8_2.0.jar` ファイルを選択します。
   - WebLogic 8 プラグインの旧バージョンをすでにインポートしてある場合は、`com.sun.weblogic8_1.0_2.0.jar` ファイルを選択します。
4. 「**Continue to Import**」ボタンをクリックします。
   インポートが正常に終了すると、プラグインの詳細ページが開いて、そのプラグインが提供するオブジェクトが表示されます。

▼ CLI を使用して WebLogic 8 プラグインをインポートする

コマンド行を使用してプラグインをインポートすることもできます。

手順

- **CLI** からプラグインファイルをインポートするには、次のように入力します。

```
% cr_cli -cmd plg.p.add -path plugin-filename -u username -p password
```

- WebLogic 8 プラグインを初めてインポートする場合は、*plugin-filename* は `com.sun.weblogic8_2.0.jar` です。
- WebLogic 8 プラグインの旧バージョンをすでにインポートしてある場合は、*plugin-filename* は `com.sun.weblogic8_1.0_2.0.jar` です。

▼ WebLogic ソフトウェアをインストールする

WebLogic ドメイン、管理サーバーまたは管理対象サーバーを作成する前に、WebLogic ソフトウェアをインストールする必要があります。WebLogic ソフトウェアをインストールする際には、ソフトウェアインストールを表す仮想ホストが作成されます。この仮想ホストは、WebLogic 管理サーバーおよび管理対象サーバーのターゲットホストとして使用します。

管理対象サーバーと管理サーバーは同じ `Install` コンポーネントを使用します。このコンポーネントがリモートエージェントに WebLogic 8 ソフトウェアをインストールします。リモートエージェントに `Install` コンポーネントをインストールしたあとは、そのコンポーネントを再インストールする必要はありません。

この手順で WebLogic ソフトウェアをインストールしたり、`markOnly` オプションを選択することでプロビジョニングシステム内部で既存のソフトウェアを登録することができます。

手順

1. ブラウザインタフェースの「**Common Tasks**」セクションで「**WebLogic 8**」をクリックします。
2. 「**WebLogic Software Installation: Install**」リンクをクリックします。
   プランの「Details」ページが表示されます。
3. 「**Run**」をクリックします。
   「Run」ページが表示されます。
4. 「**Plan Parameters**」領域で、配備する **`Install`** コンポーネントの変数設定を選択します。
   - このコンポーネントに対して変数設定が指定されている場合、メニューから適切な設定を選択します。
   - メニューから設定が使用できない場合は、「**Select From List**」をクリックします。
     「Select Variable Settings From List」ウィンドウが表示されます。
     - 変数設定の新しいセットを作成するには、「**Create Set**」を選択します。
       次のリストに、`Install` コンポーネントに関して共通して更新される変数を示します。

       変数セット名　　必須。ユーザーが作成する新しい変数設定セットの名前

beaHome	必須。WebLogic BEAHOME のディレクトリ。beaHome のデフォルト値は /usr/local/bea です。1 台のマシンに複数の WebLogic ソフトウェアをインストールする場合は、この値を更新する必要があります。

注 – このディレクトリまたはリンクはすでに存在しているか、weblogicUser によって作成可能である必要があります。ディレクトリまたはリンクが存在している場合、weblogicUser にはディレクトリへの書き込みアクセス権が必要です。

---

sourceImage	すべての非 markOnly インストールで必須。WebLogic バイナリパッケージインストーラまたは JAR ファイルへの絶対パス。
x86supplementalJAR	Solaris x86 インストールのみで必須。WebLogic Solaris x86 Supplemental JAR ファイルへの絶対パス。
sdkJavaHome	AIX および Solaris x86 JAR ファイルインストーラのみで必須。SDK バージョン 1.4.2 またはそれ以降の JAVA_HOME。
componentPaths	任意。追加コンポーネントは、パイプで区切られたリストで指定できます。たとえば WebLogic Server|WebLogic Workshop|WebLogic Integration|WebLogic Portal のように指定します。 デフォルトでは、WebLogic ドメインおよびアプリケーションサーバーの実行に必要なソフトウェアがインストールされます。追加コンポーネントを選択した場合、より多くの容量 (350M バイトより大きい値) が必要になります。
altTempDir	任意。インストールイメージを展開するための代替ディレクトリ。デフォルト値は /var/tmp ディレクトリです。/var/tmp/ ディレクトリに 1G バイトの使用可能な容量が含まれていない場合、altTempDir を別のディレクトリに設定します。
webLogicUser	必須。 WebLogic インストールを実行する UNIX ユーザー。このユーザーはインストール先ホストに存在し、beaHome ディレクトリの書き込みアクセス権を有する必要があります。

`targetRefName`	必須。このインストールの一意の仮想ホスト名。この値はドメインと管理対象サーバーの作成時にターゲットホストとして使用されます。WebLogic のインストールごとに、この変数に一意の値を指定する必要があります。 注 – 同じマシンで WebLogic ソフトウェアを複数回インストールする場合、この変数を新しい値に変更する必要があります。`beaHome` も、インストールごとに異なる必要があります。

- 別のコンポーネントから変数コンポーネントを使用するには、「**Import Set**」をクリックします。

  変数セットのインポートについての詳細は、『Sun N1 Service Provisioning System 5.1 オペレーションとプロビジョニングガイド』の「プランを実行する」を参照してください。

5. ターゲットホストを選択します。

   管理サーバーまたは管理対象サーバーとして使用するリモートエージェント上で WebLogic ソフトウェアをインストールします。

6. 「**Target Host Set** 」チェックボックスをオフにします。

7. プロビジョニングシステム内の既存の **WebLogic** ドメインを取得する場合は、「**`markOnly`**」オプションを選択します。

8. 「**Run Plan (includes preflight)**」をクリックします。

アップグレード関連の注意事項

この節では、新しいバージョンのプラグインにアップグレードしたあとで必要に応じて考慮すべき事項について説明します。

▼ 旧バージョンのコンポーネントにアクセスする

新バージョンのプラグインにアップグレードすると、新バージョンのプラグインでインストールされたコンポーネントへのリンクが表示されるようにプラグインの「Common Tasks」ページが更新されます。この機能を使用すると、最新の機能と改善された機能を含むコンポーネントを簡単に確認できます。古い機能に依存するコンポーネントには「Common Tasks」ページからのリンクがありません。

以前にインストールしたコンポーネントが見つからない場合、そのコンポーネントは旧バージョンのプラグインから作成された可能性があります。

旧バージョンのコンポーネントの確認または作業を行うには、次の手順に従います。

手順

1. 「**Common Tasks**」ページで、該当するコンポーネント作業をクリックします。
   「Component Detail」ページが表示されます。
2. 「**Component Details**」ページで、「**Version History**」をクリックします。
   コンポーネントとバージョンの一覧が表示されます。
3. 該当するリンクをクリックします。
   - コンポーネントによる作業を行うには、バージョン番号、または使用するコンポーネントに該当する「Details」リンクをクリックします。
   - コンポーネントがインストールされている場所を確認するには、「Where Installed」をクリックします。

第 4 章

WebLogic 8 プラグインの使用法

WebLogic 8 プラグインは複数の特別なコンポーネントタイプを提供し、BEA WebLogic 8 アプリケーションを使用した作業に便利な機能に簡単にアクセスできるようにします。この章では、次の内容について説明します。

- 25 ページの「Sun N1 Service Provisioning System を使用した WebLogic 8 環境のインストール法および使用法」
- 28 ページの「WebLogic インフラストラクチャーの作成」
- 40 ページの「WebLogic ドメイン、サーバー、およびクラスタの管理」
- 47 ページの「WebLogic アプリケーションの取得と編集」
- 50 ページの「コンポーネントタイプを使用した WebLogic アプリケーションの配備」
- 65 ページの「プランの使用法」
- 65 ページの「障害追跡」

Sun N1 Service Provisioning System を使用した WebLogic 8 環境のインストール法および使用法

プラグインの規定

プロビジョニングシステムを使用すると、アプリケーションのプロビジョニングと管理を行うことができます。

プランとコンポーネントプロシージャー

WebLogic 8 プラグインは、タスクを実行するためのツールとしてプランとコンポーネントプロシージャーの両方を提供します。プランを使用することで、目的の機能に直接リンクすることができます。コンポーネントプロシージャーを使用することで、実行できるタスクの数がさらに多くなります。

タスク名

WebLogic 8 プラグインでは、タスクを 4 つのカテゴリ、つまりアプリケーションタスク、インフラストラクチャータスク、構成タスク、および高度なタスクに分類しています。これらのタスクカテゴリは、実行する必要があるタスクを記述する際に同じ規則に従います。

表 **4–1** 共通のタスク名

タスク名	説明
View Installations、View Configurations、View Clusters、View Cluster Members	特定のタイプのすべてのコンポーネントがインストールされている場所のリストを表示します。
View All	指定のフォルダ内の特定のタイプのすべてのコンポーネントを表示します。
Create	このタイプの新しいコンポーネントをプロビジョニングシステムに追加できる「component Details」ページへのリンクです。既存の WebLogic Admin Server からインポートすることで、またはファイルシステムをブラウズすることで、新しいコンポーネントを作成できます。
Start または Stop	Start または Stop コンポーネントプロシージャーを実行する「component Details」ページへのリンク。
Install、Uninstall、Remove、Join、Leave	記述された機能を作成するプランを表します。

グローバルな必要条件

本書で説明されている各タスクに関しては、2 つの必要条件が存在します。

- WebLogic 管理サーバーは、数多くの処理の実行または確認に使用されます。そのため、WebLogic 8 環境を変更するタスクを実行するには、正しい接続情報が動作するプロビジョニングシステム内で管理サーバーを構成する必要があります。

注 – WebLogic ソフトウェアのインストール時、WebLogic Domain の作成時、またはエンタープライズアプリケーション (EAR)、Web アプリケーション (WAR)、および Java アーカイブ (JAR) ファイルの作成時には、管理サーバーはオンラインである必要はありません。

- プロビジョニングシステム内のすべてのタスクでは、ユーザーが特定のアクセス権を持っていることが必要になります。WebLogic プラグインを使用してタスクを実行するには、ユーザーは、コンポーネントが含まれるフォルダ上の Run Component Procedures アクセス権を有するユーザーグループに属する必要があります。また、コンポーネントの配備先のホストセットに関しては、Allow on Host Set アクセス権も必要です。

  アクセス権の詳細は、『Sun N1 Service Provisioning System 5.1 システム管理者ガイド』の第 3 章「アクセス許可を使用したアクセスの制御」を参照してください。

  グループメンバーシップを更新する方法の詳細は、『Sun N1 Service Provisioning System 5.1 システム管理者ガイド』の「ユーザーのグループメンバーシップを変更する」を参照してください。

処理の概要

プロビジョニングシステム内に WebLogic 8 環境を作成する作業は、プロビジョニングシステムを使用せずに環境を作成する処理に似ています。

1. WebLogic 8 プラグインをインポートします。

   『Sun N1 Service Provisioning System 5.1 システム管理者ガイド』の「プラグインのインポート」を参照してください。

2. WebLogic セッション変数 `WL_DEFAULT_PASSWORD` と `WL_DEFAULT_USER` を設定します。

   『Sun N1 Service Provisioning System 5.1 プランとコンポーネントの開発者ガイド』の第 5 章「セッション変数」を参照してください。

3. すべてのホストを準備します。

   WebLogic 8 プラグインには、プロビジョニングシステム内のすべてのホストに配布する必要がある新しいシステムサービスが含まれています。『Sun N1 Service Provisioning System 5.1 システム管理者ガイド』の「物理ホストの準備」を参照してください。

4. WebLogic ソフトウェアをインストールします。

   21 ページの「WebLogic ソフトウェアをインストールする」を参照してください。

5. Administrative Server をインストールすることで WebLogic ドメインを作成します。

   29 ページの「WebLogic 8 ドメインと管理サーバーを作成する」を参照してください。

6. 新しい WebLogic ドメインで管理対象サーバーを作成します。

   32 ページの「WebLogic 管理対象サーバーを作成する」を参照してください。

7. WebLogic ライセンスコンポーネントを作成し、インストールします。

   35 ページの「ライセンスコンポーネントを作成する」および35 ページの「ライセンスコンポーネントをインストールする」を参照してください。

8. (任意) WebLogic 8 クラスタを作成します。

   36 ページの「WebLogic クラスタを作成する」を参照してください。

9. (任意) 既存の管理対象サーバーをクラスタに割り当てることにより、クラスタメンバーを追加します。

   38 ページの「クラスタメンバーを作成する」を参照してください。

10. 必要に応じて、データベースへのアプリケーションの接続を構成します。

    a. 接続プールを構成します。

       56 ページの「接続プールのコンポーネントタイプ」を参照してください。

    b. (任意) マルチプールを構成します。

       57 ページの「マルチプールコンポーネントタイプ」を参照してください。

    c. データソースまたはトランザクションデータソースを構成します。

       55 ページの「データソースおよびトランザクションデータソースのコンポーネントタイプ」を参照してください。

11. アプリケーションが Java Messaging Service を使用している場合、JMS サーバーを構成します。

    59 ページの「JMS Server コンポーネントタイプ」を参照してください。

12. アプリケーションファイル (EAR、JAR、および WAR) を取得します。

    47 ページの「WebLogic アプリケーションの取得と編集」を参照してください。

13. ターゲットホスト、ホストセット、またはクラスタにアプリケーションを配備します。

    アプリケーションは、クラスタまたは管理対象サーバーのいずれかをターゲットとすることができます。

    51 ページの「エンタープライズアプリケーションのインストール」、53 ページの「Web アプリケーションのインストール」、または54 ページの「JAR または EJB ファイルのインストール」を参照してください。

WebLogic インフラストラクチャーの作成

「WebLogic 8 Common Tasks」ページを起点として、WebLogic サーバーおよびクラスタの作成と管理を行います。

▼ WebLogic 8 ドメインと管理サーバーを作成する

アプリケーションをホストする管理対象サーバーを設定する前に、ドメインおよび管理サーバーを作成する必要があります。ドメインは、管理サーバーにより管理される一連の WebLogic サーバーです。ドメインに関するすべての情報は、管理サーバー上に格納される構成ファイルに含まれています。

`AdminServer` コンポーネントをインストールして新しいドメインを作成する場合は、次の作業も行います。

- ドメインの構成
- Admin Server の仮想ホストの作成

この手順で新しいドメインを作成したり、また「`markOnly`」オプションを選択することでプロビジョニングシステム内で既存のドメインを登録することもできます。

注 – 本書では、AdminServer と管理サーバーという類似した用語を使用します。事前にパッケージされた Sun N1 Service Provisioning System WebLogic 8 コンポーネントは、AdminServer コンポーネントと呼ばれます。AdminServer はプロビジョニングシステムコンポーネントを表し、管理サーバーは WebLogic 8 環境上で動作するインストール済みアプリケーションを表します。

始める前に　WebLogic 8 ドメインを作成するには、ユーザーは、コンポーネントが含まれるフォルダ上の Run Component Procedures アクセス権を有するユーザーグループに属する必要があります。また、コンポーネントの配備先のホストセットに関しては、Allow on Host Set アクセス権も必要です。

手順

1. **WebLogic** セッション変数 **`WL_DEFAULT_USER`** および **`WL_DEFAULT_PASSWORD`** が設定されていることを確認します。

   WebLogic セッション変数は、長さが 7 文字で、数字を含んでいる必要があります。

   セッション変数の詳細は、『Sun N1 Service Provisioning System 5.1 プランとコンポーネントの開発者ガイド』の第 5 章「セッション変数」を参照してください。

2. ブラウザインタフェースの「**Common Tasks**」セクションで「**WebLogic 8**」をクリックします。

3. 「**Domain Management: Create**」リンクをクリックします。

   プランの「Details」ページが表示されます。

4. 「**Run**」をクリックします。

   「Run」ページが表示されます。

5. 「**Plan Parameters**」領域で、配備する **`AdminServer`** コンポーネントの変数設定を選択します。

- このコンポーネントに対して変数設定が指定されている場合、メニューから適切な設定を選択します。
- メニューから設定が使用できない場合は、「**Select From List**」をクリックします。

  「Select Variable Settings From List」ウィンドウが表示されます。

  - 変数設定の新しいセットを作成するには、「**Create Set**」を選択します。

    次のリストに、`AdminServer` コンポーネントの変数のうち、更新する可能性が高い変数を示します。

    `domainName` 必須。WebLogic のドメイン名です。

    `adminPort` 必須。AdminServer の仮想ホストが使用するデフォルトの TCP ポートです。

    ドメインが作成される前には、このポートが使用可能であるかチェックされます。

    `secureConnect` 任意。`True` 管理サーバーの接続に SSL ポートが使用可能であることを指定します。

    `production` 必須。この変数は、管理対象サーバーを稼働モードで実行するかどうかを決定します。稼働モードのデフォルト値は `false` です。この変数は、`true` または `false` に設定できます。

    更新される頻度が少ない変数には、次のような構成変数が含まれます。

    `adminManagedServer` 必須。ドメイン管理コンソールをホストする管理対象サーバーの名前。デフォルト値は `myserver` です。`markOnly` インストールを実行している場合は、この変数を、WebLogic インストール中に使用されるサーバー名に設定します。

    `adminHost` 必須。管理対象サーバーが管理サーバーに接続するために使用するホスト名または IP アドレス。デフォルト値は、管理サーバーが常駐しているリモートエージェントのホスト名です。

    `targetRefName` 必須。この変数は、ドメインの仮想ホストの名前になります。代入変数は、ホスト名とドメイン名の値に基づきます。この変数は、`:[`*target:sys.hostName*`]_weblogic_admin_:[`*domainName*`]` という書式になります (例: `sqa-420_weblogic_admin_wls`)。

- 別のコンポーネントから変数コンポーネントを使用するには、「**Import Set**」をクリックします。

  変数セットのインポートについての詳細は、『Sun N1 Service Provisioning System 5.1 オペレーションとプロビジョニングガイド』の「プランを実行する」を参照してください。

6. ターゲットホストを選択します。

   WebLogic ソフトウェアをインストールした時に作成された仮想ホストをターゲットとします。21 ページの「WebLogic ソフトウェアをインストールする」の手順を参照してください。

注 – ターゲットホストは、`com.sun.weblogic#InstallHS` ホストセットのメンバーである必要があります。

---

7. 「**Target Host Set** 」チェックボックスをオフにします。
8. プロビジョニングシステム内の既存の **WebLogic** ドメインを取得する場合は、「**`markOnly`**」オプションを選択します。
9. 「**Run Plan (includes preflight)**」をクリックします。

▼ 異なるパスワードを使用して複数のドメインを作成する

同じユーザーとパスワードを使用して複数のドメインを作成できます。ただし、各ドメインに異なるパスワードを使用する場合は、各ドメインのインストール後に WebLogic ユーザーおよびパスワードセッション変数を更新する必要があります。

新しいドメインを作成するプランは、必ずデフォルトセッション変数名 `WL_DEFAULT_USER` および `WL_DEFAULT_PASSWORD` を使用します。

手順

1. 新しいドメインと **AdminServer** は、デフォルトの **WebLogic** セッション変数 **`WL_DEFAULT_USER`** および **`WL_DEFAULT_PASSWORD`** を使用してインストールします。

   29 ページの「WebLogic 8 ドメインと管理サーバーを作成する」を参照してください。

2. ブラウザインタフェースの最上部の「**Session Variables**」をクリックして、「**Session Variables**」ページにアクセスします。

3. 新しくインストールされた **AdminServer** の新しいセッション変数を作成します。
   これらの新しいセッション変数の値は、AdminServer のインストールに使用したデフォルトの変数と同じ値です。

属性名	デフォルトのセッション変数名	新しいセッション変数名
`adminUser`	`WL_DEFAULT_USER`	`WL_TEST_USR`
`adminPassword`	`WL_DEFAULT_PASSWORD`	`WL_TEST_PWD`

4. 手順 **1** で作成した **AdminServer** の「**host Details**」ページにアクセスし、「**Edit**」をクリックします。
5. **AdminServer** のホストタイプ属性を更新します。
   たとえば、`adminUser` 値を `:[session:WL_TEST_USR]` に置き換えます。
6. 別のドメインをインストールする場合は「**Session Variables**」ページに戻り、デフォルトの **WebLogic** セッション変数を、インストールする次のドメインに使用する新しい値で更新します。

▼ WebLogic 管理対象サーバーを作成する

各ドメインで複数の管理対象サーバーを実行し、アプリケーションをホストすることができます。WebLogic 管理対象サーバーは Server コンポーネントにより取得され、プロビジョニングシステム内に表示されます。本書全体を通じて、「Server」はプロビジョニングシステムコンポーネントを指しますが、「管理対象サーバー」は WebLogic 8 環境で動作する管理対象サーバーのインストール済みインスタンスを指します。

この手順で新しい管理対象サーバーを作成したり、また「`markOnly`」オプションを選択することでプロビジョニングシステム内で既存の管理対象サーバーを登録することもできます。

注 – クラスタを作成する場合、クラスタを作成する「前」に、そのクラスタに属する管理対象サーバーを作成する必要があります。

始める前に WebLogic 管理対象サーバーを作成する前に、次の条件が満たされている必要があります。

- 管理対象サーバーを含むドメインが存在する必要がある。
  詳細は、29 ページの「WebLogic 8 ドメインと管理サーバーを作成する」を参照してください。
- ドメインの AdminServer が実行中である必要がある。

AdminServer を手動で起動するには、AdminServer の「component Details」ページから startAdminServer コンポーネントプロシージャーを実行します。

- WebLogic ソフトウェアが、管理対象サーバーのインストール先ホストにインストールされている必要がある。

  21 ページの「WebLogic ソフトウェアをインストールする」を参照してください。
- ユーザーは、コンポーネントを含むフォルダ上に Run Component Procedures アクセス権を有するユーザーグループに属する必要がある。また、コンポーネントの配備先のホストセットに関しては、Allow on Host Set アクセス権も必要です。

手順

1. ブラウザインタフェースの「**Common Tasks**」セクションで「**WebLogic 8**」をクリックします。
2. 「**Application Server Management: Create**」リンクをクリックします。
   プランの「Details」ページが表示されます。
3. 「**Run**」をクリックします。
   「Run」ページが表示されます。
4. 「**Plan Parameters**」領域で、配備する **`ManagedServer`** コンポーネントの変数設定を選択します。
   `Server` コンポーネントは、WebLogic 8 環境内の管理対象サーバーインスタンスを表します。
   - このコンポーネントに対して変数設定が指定されている場合、メニューから適切な設定を選択します。
   - メニューから設定が使用できない場合は、「**Select From List**」をクリックします。
     「Select Variable Settings From List」ウィンドウが表示されます。
     - 変数設定の新しいセットを作成するには、「**Create Set**」を選択します。
       次のリストに、`ManagedServer` コンポーネントの変数のうち、更新する可能性が高い変数を示します。

変数セット名	必須。ユーザーが作成する新しい変数設定セットの名前
`adminServerHostName`	必須。新しい管理対象サーバーをホストする AdminServer 仮想ホストの名前。この値の形式は、*remoteAgentName*`_weblogic_admin_`*domainName* です。 仮想ホストは「Hosts」ページにあります。仮想ホストのタイプは、`com.sun.weblogic8#AdminServerHS` です。

`targetName`	必須。新しい管理対象サーバーの名前。この名前は、管理対象サーバー仮想ホストを作成するため `targetRefName` 変数で使用されます。
`startupScriptName`	必須。管理対象サーバーの起動スクリプトの名前。 起動スクリプトのデフォルトの場所は `/usr/local/bea/user_projects/servers/`*domainName*`/`*targetName* です。この場所は、`altServerRoot` コンポーネント変数を設定することにより変更できます。
`serverPort`	SSL を使用しない場合は必須。この変数のデフォルト値は 7010 です。このポートが使用できない場合、管理対象サーバーは起動せず、エラーメッセージが表示されます。ポートを解放したあと、管理対象サーバーの「component Details」ページで Start コンポーネントプロシージャーを実行することで管理対象サーバーを起動できます。
`serverSslPort`	SSL を使用する場合は必須。この変数のデフォルト値は 7020 です。このポートは使用可能である必要があります。使用できない場合、管理対象サーバーは起動せず、エラーメッセージが表示されます。ポートを解放したあと、管理対象サーバーの「component Details」ページで Start コンポーネントプロシージャーを実行することで管理対象サーバーを起動できます。
`production`	必須。この変数は、管理対象サーバーを稼働モードで実行するかどうかを決定します。稼働モードのデフォルト値は `false` です。この変数は、`true` または `false` に設定できます。

- 別のコンポーネントから変数コンポーネントを使用するには、「**Import Set**」をクリックします。

  変数セットのインポートについての詳細は、『Sun N1 Service Provisioning System 5.1 オペレーションとプロビジョニングガイド』の「プランを実行する」を参照してください。

5. ターゲットホストまたはターゲットホストセットを選択します。

   管理対象サーバーはターゲットとするリモートエージェントに常駐します。

注 – ターゲットホストは、com.sun.weblogic#AdminServer ホストセットのメンバーである必要があります。

6. 「**Target Host Set** 」チェックボックスをオフにします。
7. プロビジョニングシステム内で既存の **WebLogic** 管理対象サーバーを取得している場合は、「**markOnly**」オプションを選択します。
8. 「**Run Plan (includes preflight)**」をクリックします。

▼ ライセンスコンポーネントを作成する

この手順では、ライセンスコンポーネントの作成方法を説明します。ライセンスコンポーネントを作成したあとは、35 ページの「ライセンスコンポーネントをインストールする」を参照してライセンスをインストールしてください。

手順

1. ブラウザインタフェースの「**Common Tasks**」セクションで「**WebLogic 8**」をクリックします。
2. 「**License Management: Create**」リンクをクリックします。
   コンポーネントの「Edit」ページが表示されます。
3. 新しいライセンスコンポーネントの名前を入力します。
4. **(**省略可能**)** コンポーネントのラベルと説明を入力します。
5. ファイルシステム上に **BEA** ライセンスのコピーがあるホストを選択します。
6. ホストのファイルシステムをナビゲートし、ライセンスファイルを選択します。
7. 「**Check In Selected Item**」をクリックします。
   コンポーネントの「Check In」ページが表示されます。
8. 編集アクセス権を持っているフォルダを選択します。
9. 「**Continue to Check In**」をクリックします。

▼ ライセンスコンポーネントをインストールする

始める前に　ライセンスコンポーネントをインストールするには、プロビジョニングシステム内にライセンスコンポーネントが存在する必要があります。35 ページの「ライセンスコンポーネントを作成する」を参照してください。

手順 1. ブラウザインタフェースの「**Common Tasks**」セクションで「**WebLogic 8**」をクリックします。

2. 「**License Management: View All**」リンクをクリックします。
「Components」ページが表示されます。

3. インストールするライセンスコンポーネントの行で「**Details**」をクリックします。
コンポーネントの「Details」ページが表示されます。

4. 「**Component Procedures**」テーブルで「**Default: Install**」プロシージャーを選択し、「**Run**」をクリックします。
プランの「Run」ページが表示されます。

5. ターゲットホストを選択します。
AdminServer の仮想ホストをターゲットにします。

注 – ライセンスのインストール用にコンポーネント変数を変更する必要はありません。

---

6. **(**省略可能**)** 既存のライセンスを置き換える場合は、「**Plan Variables**」セクションで、「**Replace Rather Than Merge With Existing License**」オプションを選択します。

注 – 既存のライセンスを置き換えることを選択した場合、新しいライセンスを有効にするには、WebLogic ドメインを再起動する必要があります。

---

7. 「**Run Plan (includes preflight)**」をクリックします。

▼ WebLogic クラスタを作成する

次のような理由により、クラスタを作成しなければならない場合があります。

- サーバーのフェイルオーバー機能を使用してアプリケーションの可用性を高める
- 複数のサーバーでアプリケーションをスケーリングすることでスループットを高める

クライアントに対してはクラスタは 1 つの WebLogic 管理対象サーバーインスタンスとして表示されます。クラスタを構成するサーバーインスタンスは、同一マシン上で実行したり、複数のマシンに配置することができます。クラスタ内の各クラスタメンバーは、同じバージョンの WebLogic を実行する必要があります。

この手順で新しいクラスタを作成したり、また「markOnly」オプションを選択することでプロビジョニングシステム内で既存のクラスタを登録することもできます。

始める前に　WebLogic クラスタを作成する前に、クラスタ内で使用する WebLogic ドメイン、管理サーバーおよび管理対象サーバーを作成する必要があります。

WebLogic クラスタを作成するには、ユーザーは、コンポーネントが含まれるフォルダ上の Run Component Procedures アクセス権を有するユーザーグループに属する必要があります。また、コンポーネントの配備先のホストセットに関しては、Allow on Host Set アクセス権も必要です。

手順

1. ブラウザインタフェースの「**Common Tasks**」セクションで「**WebLogic 8**」をクリックします。
2. 「**Cluster Management: Create**」リンクをクリックします。
   プランの「Details」ページが表示されます。
3. 「**Run**」をクリックします。
   「Run」ページが表示されます。
4. 「**Plan Parameters**」領域で、配備する **Cluster** コンポーネントの変数設定を選択します。
   - このコンポーネントに対して変数設定が指定されている場合、メニューから適切な設定を選択します。
   - メニューから設定が使用できない場合は、「**Select From List**」をクリックします。
     「Select Variable Settings From List」ウィンドウが表示されます。
     - 変数設定の新しいセットを作成するには、「**Create Set**」を選択します。
       次のリストに、ManagedServer コンポーネントの変数のうち、更新する可能性が高い変数を示します。

変数セット名	必須。ユーザーが作成する新しい変数設定セットの名前
targetName	必須。新しいクラスタの名前。
clusterAddress	任意。この変数には、複数の IP アドレスに対応する DNS ホスト名、またはシングルアドレスホスト名や IP アドレスのコンマ区切りリストを使用できます。この変数には値は必要ありません。
multicastAddress	この変数は、クラスタメンバーが相互通信に使用できるアドレスを提供します。

- 別のコンポーネントから変数コンポーネントを使用するには、「**Import Set**」をクリックします。

  変数セットのインポートについての詳細は、『Sun N1 Service Provisioning System 5.1 オペレーションとプロビジョニングガイド』の「プランを実行する」を参照してください。

5. ターゲットホストを選択します。

   Administrative Server にはクラスタのみをインストールできるため、ターゲットホストは AdminServer 仮想ホストです。

6. 「**Target Host Set** 」チェックボックスをオフにします。

7. プロビジョニングシステム内で既存の **WebLogic** クラスタを取得している場合は、「**`markOnly`**」オプションを選択します。

8. 「**Run Plan (includes preflight)**」をクリックします。

▼ クラスタメンバーを作成する

クラスタノードは、クラスタに割り当てられる管理対象サーバーです。アプリケーションの可用性とスケーラビリティーを高めるために、クラスタメンバーを作成できます。

管理対象サーバーがクラスタに参加すると、現在管理対象サーバーがターゲットであるアプリケーションは引き続きそのサーバーをターゲットとし、アプリケーションの配備状態は保存されます。クラスタメンバーを作成するプランは、自動的に管理対象サーバーを停止し、それをクラスタに追加します。管理対象サーバーが追加されたあと、プランは管理対象サーバーを再起動します。

この手順で新しいクラスタメンバーを作成したり、また「`markOnly`」オプションを選択することでプロビジョニングシステム内で既存のクラスタメンバーを登録することもできます。

始める前に　クラスタメンバーを作成する前に、次の条件が満たされている必要があります。

- クラスタメンバーに変換する管理対象サーバーが存在する必要がある。

  詳細は、32 ページの「WebLogic 管理対象サーバーを作成する」を参照してください。

- ノードの追加先のクラスタが存在する必要がある。

  詳細については、36 ページの「WebLogic クラスタを作成する」を参照してください。

クラスタメンバーを作成するには、ユーザーは、コンポーネントが含まれるフォルダ上の Run Component Procedures アクセス権を有するユーザーグループに属する必要があります。また、コンポーネントの配備先のホストセットに関しては、Allow on Host Set アクセス権も必要です。

手順

1. ブラウザインタフェースの「**Common Tasks**」セクションで「**WebLogic 8**」をクリックします。
2. 「**Cluster Member Management: Join**」リンクをクリックします。
   プランの「Details」ページが表示されます。
3. 「**Run**」をクリックします。
   プランの「Run」ページが表示されます。
4. クラスタに追加する管理対象サーバーを選択します。
   - 管理対象サーバーの名前を入力するか、リストから選択して、ターゲットホストを選択します。

     注 – 「Target Host Set」オプションは自動的に選択されます。1 つの管理対象サーバーを選択する場合は、「Target Host Set」チェックボックスをオフにします。

   - メニューからターゲットホストセットを選択します。
5. プラン変数 **WebLogic Cluster Name** に正しいクラスタ名が含まれていることを確認します。
6. サーバーが再起動されたことを確認する前にプロビジョニングシステムが待機する期間を指定するには、「**Seconds to Wait Before Failing Verify Step**」フィールドに秒数を入力します。
7. プロビジョニングシステム内で既存の **WebLogic** クラスタメンバーを取得している場合は、「**`markOnly`**」オプションを選択します。
8. 「**Run Plan (includes preflight)**」をクリックします。

WebLogic ドメイン、サーバー、およびクラスタの管理

この節では、WebLogic サーバーをインストールしたあとに WebLogic サーバーおよびクラスタで一般に実行するタスクを説明します。

ドメインと Administrative Server

- 40 ページの「WebLogic ドメインと管理サーバーを削除する」

クラスタ

- 42 ページの「クラスタを起動または停止する」
- 42 ページの「WebLogic クラスタを削除する」
- 43 ページの「WebLogic クラスタメンバーを削除する」

管理対象サーバー

- 44 ページの「管理対象サーバーを起動する」
- 45 ページの「管理対象サーバーを停止する」
- 46 ページの「管理対象サーバーを削除する」
- 46 ページの「管理対象サーバーに追加 CLASSPATH 要素を追加する」

WebLogic ドメインと管理サーバーの管理

この節では、WebLogic ドメインと管理サーバーを管理する手順を説明します。

▼ WebLogic ドメインと管理サーバーを削除する

プロビジョニングシステムを介して WebLogic ドメインを削除することで、自動的に次のタスクを実行します。

- WebLogic AdminServer コンポーネントおよび仮想ホストのアンインストール。

  このタスクは管理サーバーを削除します。「markOnly」オプションを選択した場合、AdminServer 仮想ホストだけが削除されます。
- ドメイン内に属するすべての管理対象サーバーコンポーネントおよび仮想ホストのアンインストール。

  この操作を行うと、markOnly オプションを選択している場合を除き、WebLogic 環境内の管理対象サーバーも削除されます。
- ドメイン内に属するすべてのクラスタコンポーネントおよび仮想ホストのアンインストール。

この操作は、 ユーザーが「markOnly」オプションを選択している場合を除き、WebLogic 環境内のクラスタも削除します。

- アプリケーションコンポーネント、ライセンス構成、およびアプリケーションの削除。

注 – WebLogic 仮想ホストは、プラグインに属さないコンポーネントを含むことはできません。WebLogic ドメインを正しく削除するには、ドメインアンインストールプランを実行する前に、プラグインに属さないすべてのコンポーネントを削除する必要があります。

始める前に　WebLogic ドメインを削除するには、ユーザーは、コンポーネントが含まれるフォルダ上の Run Component Procedures アクセス権を有するユーザーグループに属する必要があります。また、コンポーネントの配備先のホストセットに関しては、Allow on Host Set アクセス権も必要です。

手順

1. ブラウザインタフェースの「**Common Tasks**」セクションで「**WebLogic 8**」をクリックします。
2. 「**Domain Management: Remove**」リンクをクリックします。
   プランの「Details」ページが表示されます。
3. 「**Run**」をクリックします。
   プランの「Run」ページが表示されます。
4. ターゲットホストを選択します。
   WebLogic ソフトウェアをインストールした時に作成された仮想ホストをターゲットとします。21 ページの「WebLogic ソフトウェアをインストールする」の手順を参照してください。

   注 – ターゲットホストは、com.sun.weblogic#InstallHS ホストセットのメンバーである必要があります。

   ---

5. 「**WebLogic Domain Name**」フィールドに **WebLogic** ドメインの名前を入力します。
6. プロビジョニングシステムから **WebLogic** ドメイン、管理サーバー、クラスタ、および管理対象サーバーを削除し、**WebLogic** 環境でドメインを動作させ続ける場合は、「**markOnly** 」オプションを選択します。
7. 「**Run Plan (includes preflight)**」をクリックします。

WebLogic クラスタの管理

次の節では、クラスタを起動、停止、および削除する方法を説明します。

▼ クラスタを起動または停止する

クラスタを起動または停止すると、クラスタ内のすべてのクラスタメンバーを起動または停止することになります。

手順

1. ブラウザインタフェースの「**Common Tasks**」セクションで「**WebLogic 8**」をクリックします。
2. 「**Cluster Management: Start or Stop**」リンクをクリックします。
   「component Details」ページが表示されます。
3. 「**Component Procedures**」リストで、**Start** または **Stop** プロシージャーを含む行を選択し、「**Run**」をクリックします。
   プランの「Run」ページが表示されます。
4. 起動または停止するクラスタを選択します。
   クラスタ名は `installPath` の一部です。
5. 「**Run Selected Installations**」をクリックします。
   プランの「Run」ページが表示されます。
6. 「**Run Plan (includes preflight)**」をクリックします。

▼ WebLogic クラスタを削除する

クラスタを削除すると、そのクラスタに関連付けられたすべてのクラスタメンバーも削除されます。

管理対象サーバーの役割に戻るクラスタメンバーの動作の詳細については、43 ページの「WebLogic クラスタメンバーを削除する」を参照してください。

注 – 管理対象サーバーをクラスタから削除すると、管理対象サーバーは停止されます。引き続き管理対象サーバーを使用する場合は、管理対象サーバーを再起動する必要があります。44 ページの「管理対象サーバーを起動する」を参照してください。

始める前に　クラスタを削除するには、ユーザーは、コンポーネントが含まれるフォルダ上の Run Component Procedures アクセス権を有するユーザーグループに属する必要があります。また、コンポーネントの配備先のホストセットに関しては、Allow on Host Set アクセス権も必要です。

手順

1. ブラウザインタフェースの「**Common Tasks**」セクションで「**WebLogic 8**」をクリックします。
2. 「**Cluster Management: Remove**」リンクをクリックします。
   プランの「Details」ページが表示されます。
3. 「**Run**」をクリックします。
   プランの「Run」ページが表示されます。
4. 「**Target Host**」フィールドで、クラスタをホストするドメインを選択します。
5. 「**Target Host Set** 」チェックボックスをオフにします。
6. 「**Plan Variables**」セクションの「**WebLogic Cluster Name**」フィールドで、**WebLogic** インタフェースに表示されるクラスタ名を入力します。
7. プロビジョニングシステムから **WebLogic** クラスタを削除するが、そのクラスタを **WebLogic** 環境で動作させ続ける場合は、「**`markOnly`**」オプションを選択します。
8. 「**Run Plan (includes preflight)**」をクリックします。

▼ WebLogic クラスタメンバーを削除する

クラスタメンバーを削除すると、クラスタメンバーコンポーネントが管理対象サーバーから削除され、クラスタメンバーとして動作していた管理対象サーバーが元の状態に戻ります。クラスタをターゲットとしていたアプリケーション、およびクラスタメンバーは、再起動後、管理対象サーバーによりホストされなくなります。管理対象サーバーを直接ターゲットとしていたアプリケーションは、引き続き管理対象サーバーをターゲットとします。

クラスタから管理対象サーバーが削除されると、管理対象サーバーは停止状態のままになります。引き続き管理対象サーバーを使用する場合は、管理対象サーバーを再起動する必要があります。44 ページの「管理対象サーバーを起動する」を参照してください。

始める前に　クラスタメンバーを削除するには、ユーザーは、コンポーネントが含まれるフォルダ上の Run Component Procedures アクセス権を有するユーザーグループに属する必要があります。また、コンポーネントの配備先のホストセットに関しては、Allow on Host Set アクセス権も必要です。

手順

1. ブラウザインタフェースの「**Common Tasks**」セクションで「**WebLogic 8**」をクリックします。
2. 「**Clusters Member Management: Leave**」リンクをクリックします。
   プランの「Details」ページが表示されます。
3. 「**Run**」をクリックします。
   プランの「Run」ページが表示されます。
4. 削除する管理対象サーバーを選択します。
5. 「**Target Host Set** 」チェックボックスをオフにします。
6. プロビジョニングシステムから **WebLogic** クラスタメンバーを削除するが、**WebLogic** 環境でクラスタメンバーを動作させ続ける場合は、「**`markOnly`**」オプションを選択します。
7. 「**Run Plan (includes preflight)**」をクリックします。

WebLogic 管理対象サーバーの管理

▼ 管理対象サーバーを起動する

始める前に　管理対象サーバーを起動するには、ユーザーは、コンポーネントが含まれるフォルダ上の Run Component Procedures アクセス権を有するユーザーグループに属する必要があります。また、コンポーネントの配備先のホストセットに関しては、Allow on Host Set アクセス権も必要です。

手順

1. ブラウザインタフェースの「**Common Tasks**」セクションで「**WebLogic 8**」をクリックします。
2. 「**Application Server Management: Start**」リンクをクリックします。
   「component Details」ページが表示されます。
3. 「**Component Procedures**」リストで、**Start** プロシージャーを含む行を選択し、「**Run**」をクリックします。
   プランの「Run」ページが表示されます。
4. 起動する必要がある管理対象サーバーを選択します。
   管理対象サーバーは *host (install-path)* の形式に従います。*host* は物理ホストの名前を表し、*install-path* は管理対象サーバーの名前を表します。管理対象サーバー名は `server_wls_`*managedServerName* と表示されます。たとえば、`server_wls_Server-One` となります。

5. 「**Run Selected Installations**」をクリックします。
   プランの「Run」ページが表示されます。

6. プラン変数を設定します。

   a. **(**省略可能**) Java** に渡される標準メモリー引数をオーバーライドするには、「**`VmArgs`**」フィールドに名前を入力します。
      「`vmArgs`」フィールドに使用される形式は、*–virtualMachineName* です。たとえば `-Xms32m -Xmx200m` のようになります。

   b. サーバーが起動したことを確認する前にプロビジョニングシステムが待機する期間を指定するには、「**Seconds to Wait Before Failing Verify Step**」フィールドに秒数を入力します。

7. 「**Run Plan (includes preflight)**」をクリックします。

▼ 管理対象サーバーを停止する

始める前に　管理対象サーバーを停止するには、ユーザーは、コンポーネントが含まれるフォルダ上の Run Component Procedures アクセス権を有するユーザーグループに属する必要があります。また、コンポーネントの配備先のホストセットに関しては、Allow on Host Set アクセス権も必要です。

手順

1. ブラウザインタフェースの「**Common Tasks**」セクションで「**WebLogic 8**」をクリックします。

2. 「**Application Server Management: Stop**」リンクをクリックします。
   「component Details」ページが表示されます。

3. 「**Component Procedures**」リストで、**Stop** プロシージャーを含む行を選択し、「**Run**」をクリックします。
   プランの「Run」ページが表示されます。

4. 起動する必要がある管理対象サーバーを選択します。
   管理対象サーバーは *host (install path)* の形式に従います。*host* は物理ホストの名前を表し、*install path* は管理対象サーバーの名前を表します。管理対象サーバー名は `server_`*domainName*`_`*managedServerName* と表示されます。たとえば、`server_wls_Server-One` のようになります。

5. 「**Run Selected Installations**」をクリックします。
   プランの「Run」ページが表示されます。

6. 「**Run Plan (includes preflight)**」をクリックします。

▼ 管理対象サーバーを削除する

手順 **1.** ブラウザインタフェースの「**Common Tasks**」セクションで「**WebLogic 8**」をクリックします。

2. 「**Application Server Management: Remove**」リンクをクリックします。
プランの「Details」ページが表示されます。

3. 「**Run**」をクリックします。
プランの「Run」ページが表示されます。

4. 削除する管理対象サーバーを選択します。

5. 必要に応じてプラン変数を変更します。

a. **WebLogic** 管理対象サーバーの名前を入力します。

b. 管理対象サーバーが登録されている **WebLogic** ドメインの名前を入力します。

c. プロビジョニングシステムから **WebLogic** 管理対象サーバーを削除するが、**WebLogic** 環境で管理対象サーバーを動作させ続ける場合は、「**`markOnly`**」オプションを選択します。

6. 「**Run Plan (includes preflight)**」をクリックします。

▼ 管理対象サーバーに追加 CLASSPATH 要素を追加する

手順 **1.** ブラウザインタフェースの「**Common Tasks**」セクションで「**WebLogic 8**」をクリックします。

2. 「**Application Server Management: Start**」リンクをクリックします。
「component Details」ページが表示されます。

3. 「**Component Procedures**」 リストで、**setAdditionalClasspath** プロシージャーを含む行を選択し、「**Run**」をクリックします。
プランの「Run」ページが表示されます。

4. 更新する管理対象サーバーを選択します。
管理対象サーバーは *host (install path)* の形式に従います。*host* は物理ホストの名前を表し、*install path* は管理対象サーバーの名前を表します。管理対象サーバー名は `server_`*domainName*`_`*managedServerName* と表示されます。たとえば、`server_wls_Server-One` のようになります。

5. 「**Run Selected Installations**」をクリックします。
プランの「Run」ページが表示されます。

6. 追加 **CLASSPATH** 要素を入力します。

   追加 CLASSPATH 要素は、WebLogic 管理対象サーバー起動スクリプトで定義されているデフォルトの CLASSPATH に加えられます。この起動スクリプトは、管理対象サーバーが作成された時に定義されたものです。32 ページの「WebLogic 管理対象サーバーを作成する」を参照してください。

7. **(**省略可能**)** 追加 **classpath** 要素をただちに有効にするには、「**Restart Server**」を選択します。

8. 「**Run Plan (includes preflight)**」をクリックします。

WebLogic アプリケーションの取得と編集

「WebLogic Common Tasks」ページでは、WebLogic Enterprise、EJB テクノロジー、および Web アプリケーションの取得、構成、および配備を行うことができます。

次の節で説明する、複数の特別なタスクを実行できます。

- 47 ページの「WebLogic エンタープライズアプリケーションまたは EAR ファイルを取得する」
- 48 ページの「WebLogic Web アプリケーションまたは WAR ファイルを取得する」
- 49 ページの「WebLogic JAR ファイルを取得する」

注 – Sun N1 Service Provisioning System の外部では、WebLogic アプリケーションの配備や管理を行わないでください。プロビジョニングソフトウェアを使用する場合、プロビジョニングソフトウェアのみを使用して WebLogic アプリケーションを管理する必要があります。

▼ WebLogic エンタープライズアプリケーションまたは EAR ファイルを取得する

手順 1. ブラウザインタフェースの「**Common Tasks**」セクションで、「**WebLogic**」をクリックします。

2. 「**Enterprise Applications (EAR): Create**」リンクをクリックします。

3. このコンポーネントのラベルを入力します。
4. このコンポーネントの説明を入力します。
5. アプリケーションをどのようにインポートするかを選択します。
   詳細については、51 ページの「エンタープライズアプリケーションのブラウズ」を参照してください。
   - **AdminServer** からインポートする場合は、「**WebLogic Admin Server**」を選択し、 **EAR** ファイルのインポート元である **WebLogic Admin Server** を選択します。
   - ファイルシステムからインポートする場合は、「**File System**」を選択し、**EAR** ファイルのインポート元であるホストを選択します。
6. 階層をナビゲートして、取得するエンタープライズアプリケーションを検索します。
7. 「**Check-in Selected Item**」をクリックします。
8. 「**check-in**」ページの情報を確認して、「**Continue to Check-in**」をクリックします。

▼ WebLogic Web アプリケーションまたは WAR ファイルを取得する

手順
1. ブラウザインタフェースの「**Common Tasks**」セクションで、「**WebLogic**」をクリックします。
2. 「**WebLogic Common Tasks**」ページの「**Web Applications (WAR)**」セクションで「**Create**」をクリックします。
3. このコンポーネントのラベルを入力します。
4. このコンポーネントの説明を入力します。
5. アプリケーションをどのようにインポートするかを選択します。
   詳細については、52 ページの「Web アプリケーションのブラウズ」を参照してください。
   - **AdminServer** からインポートする場合は、「**WebLogic Admin Server**」を選択し、 **WAR** ファイルのインポート元である **WebLogic Admin Server** を選択します。
   - ファイルシステムからインポートする場合は、「**File System**」を選択し、**WAR** ファイルのインポート元であるホストを選択します。

6. 階層をナビゲートして、取得する **Web** アプリケーションを検索します。
7. 「**Check-in Selected Item**」をクリックします。
8. 「**check-in**」ページの情報を確認して、「**Continue to Check-in**」をクリックします。

▼ WebLogic JAR ファイルを取得する

手順

1. ブラウザインタフェースの「**Common Tasks**」セクションで、「**WebLogic**」をクリックします。
2. 「**WebLogic Common Tasks**」ページの「**Java Archives Containing EJBs (JAR)**」セクションで「**Create**」をクリックします。
3. このコンポーネントのラベルを入力します。
4. このコンポーネントの説明を入力します。
5. **JAR** ファイルをどのようにインポートするかを選択します。
   詳細については、54 ページの「JAR または EJB ファイルのブラウズ」を参照してください。
   - **AdminServer** からインポートする場合は、「**WebLogic Admin Server**」を選択し、 **JAR** ファイルのインポート元である **WebLogic Admin Server** を選択します。
   - ファイルシステムからインポートする場合は、「**File System**」を選択し、**JAR** ファイルのインポート元であるホストを選択します。
6. 階層をナビゲートして、取得する **JAR** ファイルを検索します。
7. 「**Check-in Selected Item**」をクリックします。
8. 「**check-in**」ページの情報を確認して、「**Continue to Check-in**」をクリックします。

コンポーネントタイプを使用した WebLogic アプリケーションの配備

WebLogic 8 プラグインには WebLogic に固有の複数のコンポーネントタイプが含まれています。これらのコンポーネントタイプを使用すると、最も一般的な WebLogic アプリケーションコンポーネントの多くを素早くモデル化し、特定のリソースとインストール、アンインストール、エクスポート、およびスナップショット動作を自動的に関連付けることができます。サーバーやクラスタを作成、管理する際には、コンポーネントタイプの多くがソフトウェアにより使用されます。その結果、通常は少数のコンポーネントタイプのみで作業を行います。

- 51 ページの「エンタープライズアプリケーション (EAR) コンポーネントタイプ」
- 52 ページの「Web アプリケーション (WAR) コンポーネントタイプ」
- 54 ページの「EJB コンポーネントタイプを含む Java アーカイブファイル」

ただし、アプリケーションのニーズに応じて、アプリケーションコンポーネントを配備する前に WebLogic サービスを構成しなければならない場合があります。サービスを構成するには、次の節で説明されているコンポーネントタイプに依存しなければならない場合があります。

- 55 ページの「データソースおよびトランザクションデータソースのコンポーネントタイプ」
- 55 ページの「データソースおよびトランザクションデータソースのコンポーネントタイプ」
- 56 ページの「接続プールのコンポーネントタイプ」
- 57 ページの「マルチプールコンポーネントタイプ」
- 58 ページの「スレッドプールコンポーネントタイプ」
- 58 ページの「トランザクションサービスコンポーネントタイプ」
- 59 ページの「JMS Server コンポーネントタイプ」
- 60 ページの「メールセッションコンポーネントタイプ」

これらの構成コンポーネントタイプが必要であるのは、アプリケーションで必要とされる場合のみです。たとえば、Web アプリケーションがデータベースを使用して情報の取得と格納を行う場合、接続プールとデータソースあるいはトランザクションデータソースを構成する必要があります。

これらの構成コンポーネントタイプを使用するには、実行するタスクを選択し、関連付けられたコンポーネントプロシージャーを実行します。ファイルシステムのほかの場所に存在する既存のコンポーネントに基づいて新しいコンポーネントを作成およびチェックインする必要がある場合は、「Create」をクリックします。新しいコンポーネントをチェックインしたあと、適切なコンポーネントプロシージャーを実行し、アプリケーションのニーズに従って WebLogic 環境を構成します。

通常は、アプリケーションを配備する前にこれらの構成コンポーネントタイプの構成と配備を行います。ただし、構成が完了したあとでアプリケーションを再起動することによってアプリケーションコンポーネントが配備されたあとに、WebLogic 環境を構成できます。アプリケーションを再起動するにはアプリケーションを再配備します。

これらの構成オブジェクトの構成についての詳細は、BEA's Administration Console Online Helpを参照してください。

エンタープライズアプリケーション (EAR) コンポーネントタイプ

このタイプのコンポーネントは、エンタープライズアプリケーションをモデル化します。このコンポーネントは、エンタープライズアプリケーションアーカイブ (EAR) またはパッケージとして EAR の拡張版を含むことができます。

エンタープライズアプリケーションのブラウズ

次のブラウザのいずれかを使用して、このコンポーネントタイプのエンタープライズアプリケーションを選択できます。

- インストールされたアプリケーションのいずれかとその関連設定を選択できる WebLogic 管理サーバーブラウザ。管理サーバーブラウザは、管理サーバー上のエンタープライズアプリケーションのアルファベット順リストを提供します。あるコンポーネント用に 1 つのエンタープライズアプリケーションを選択できます。
- EAR ファイルを選択して、設定が含まれないコンポーネントを作成できる、ファイルシステムブラウザ。ファイルシステムブラウザは、ユーザーが選択できるファイルとディレクトリのリストを提供します。これらのファイルまたはタイプ `*.ear` のみをブラウザに表示させることを選択できます。

エンタープライズアプリケーションのインストール

エンタープライズアプリケーションコンポーネントをインストールするには、ターゲットホストとして WebLogic 管理対象サーバーまたはクラスタを使用する必要があります。インストールプロセスにより、次の 3 つの主要タスクが実行されます。

1. ターゲットへの EAR ファイルのインストール。
2. WebLogic 管理サーバーへの EAR の登録。
3. ドメインのブラウズで以前に取得されたプロパティーの適用。

アプリケーションの「component Details」ページにナビゲートし、 Install コンポーネントプロシージャーを実行することにより、エンタープライズアプリケーションをインストールできます。

エンタープライズアプリケーションのアンインストール

エンタープライズアプリケーションコンポーネントをアンインストールすると、エンタープライズアプリケーションは仮想ホストをターゲットとはしなくなります。ほかの場所でもエンタープライズアプリケーションがターゲットとされていない場合、管理サーバーから登録コンポーネントが削除されます。

アプリケーションの「component Details」ページにナビゲートし、 Uninstall コンポーネントプロシージャーを実行することにより、エンタープライズアプリケーションをアンインストールできます。

エラー状態

表 **4–2** WebLogic エンタープライズアプリケーションのエラー状態

アクション	条件	結果
インストール	トポロジが正しく構成されていない (ターゲットホストが正しいドメインホストをポイントしていない)	ターゲット化が失敗する
インストール	ターゲットホストが有効な WebLogic ターゲットではない	インストールが禁止される
ブラウズ/インストール/アンインストール	資格が適切に構成されていない	操作が失敗する
ブラウズ	ドメインホストでパスが正しく構成されていない	ブラウズが失敗する

Web アプリケーション (WAR) コンポーネントタイプ

このタイプのコンポーネントには Web アプリケーションが含まれます。コンポーネントには、関連する設定を持つ Web アプリケーション、または設定を持たない Web アプリケーションのいずれかが含まれます。

Web アプリケーションのブラウズ

次のブラウザのいずれかを使用して、このコンポーネントタイプの Web アプリケーションを選択できます。

- インストールされたアプリケーションのいずれかとその関連設定を選択できる WebLogic 管理サーバーブラウザ。管理サーバーブラウザは、管理サーバー上の Web アプリケーションのアルファベット順リストを提供します。1 つのコンポーネ

ントに対して 1 つの Web アプリケーションを選択できます。

- WAR ファイルを選択して、設定が含まれないコンポーネントを作成できる、ファイルシステムブラウザ。ファイルシステムブラウザは、ユーザーが選択できるファイルとディレクトリのリストを提供します。これらのファイルまたはタイプ `*.war` のみをブラウザに表示させることを選択できます。

Web アプリケーションのインストール

Web アプリケーションコンポーネントをインストールするには、ターゲットホストとして WebLogic 管理対象サーバーまたはクラスタを使用する必要があります。インストールプロセスでは、そのターゲットにコンポーネントがインストールされ、ターゲットの管理サーバーには包含される登録コンポーネントがインストールされます。

アプリケーションの「component Details」ページにナビゲートし、Install コンポーネントプロシージャーを実行することにより、Web アプリケーションをインストールできます。

Web アプリケーションのアンインストール

Web アプリケーションコンポーネントをアンインストールすると、Web アプリケーションは仮想ホストをターゲットとはしなくなります。ほかの場所でも Web アプリケーションがターゲットとされていない場合、管理サーバーから登録コンポーネントが削除されます。

アプリケーションの「component Details」ページにナビゲートし、Uninstall コンポーネントプロシージャーを実行することにより、Web アプリケーションをアンインストールできます。

エラー状態

表 4–3 WebLogic Web アプリケーションのエラー状態

アクション	条件	結果
インストール	トポロジが正しく構成されていない (ターゲットホストが正しいドメインホストをポイントしていない)	ターゲット化が失敗する。
インストール	ターゲットホストが有効な WebLogic ターゲットではない。	インストールが禁止される。
ブラウズ/インストール/アンインストール	資格が適切に構成されていない。	操作が失敗する。

表 **4–3** WebLogic Web アプリケーションのエラー状態　(続き)

アクション	条件	結果
ブラウズ	ドメインホストでパスが正しく構成されていない。	ブラウズが失敗する。

EJB コンポーネントタイプを含む Java アーカイブファイル

JAR または EJB ファイルのブラウズ

次のブラウザのいずれかを使用して、このコンポーネントタイプの JAR または EJB ファイルを選択できます。

- インストールされたアプリケーションのいずれかとその関連設定を選択できる WebLogic 管理サーバーブラウザ。管理サーバーブラウザは、管理サーバー上のアプリケーションのアルファベット順リストを提供します。1 つのコンポーネントに対して 1 つの EJB を選択できます。
- JAR ファイルを選択して、設定が含まれないコンポーネントを作成できる、ファイルシステムブラウザ。ファイルシステムブラウザは、ユーザーが選択できるファイルとディレクトリのリストを提供します。これらのファイルまたはタイプ `*.jar` のみをブラウザに表示させることを選択できます。

JAR または EJB ファイルのインストール

このタイプのコンポーネントをインストールすると、インストールパスに基づいてファイルまたはディレクトリがファイルシステムにコピーされます。コピーが完了すれば、ファイルまたはディレクトリは WebLogic 管理サーバーに登録されます。

アプリケーションの「component Details」ページにナビゲートし、Install コンポーネントプロシージャーを実行することにより、JAR または EJB ファイルをインストールできます。

JAR または EJB ファイルのアンインストール

このタイプのコンポーネントをアンインストールすると、マスターサーバーからファイルまたはディレクトリが削除されます。

「component Details」ページにナビゲートし、Uninstall コンポーネントプロシージャーを実行することにより、JAR または EJB ファイルをアンインストールできます。

エラー状態

表 **4–4** WebLogic EJB コンテナのエラー状態

アクション	条件	結果
アンインストール	依存する WebLogic EJB が依然としてインストールされている。	依存関係を示し、アンインストールが失敗する。

データソースおよびトランザクションデータソースのコンポーネントタイプ

データソースまたはトランザクションデータソースのブラウズ

WebLogic 管理サーバーブラウザを使用すると、このブラウザからデータソースまたはトランザクションデータソースおよびその関連設定を選択できます。管理サーバーブラウザは、管理サーバー上のアプリケーションのアルファベット順リストを提供します。

WebLogic プラグインにはデフォルトのデータソースおよびトランザクションデータソースも含まれているため、ブラウズする必要がありません。「Common Tasks」ページから「View All」を選択することにより、`/com/sun/webLogic8` フォルダでデフォルトのコンポーネントを検索できます。デフォルトのコンポーネントは、Default: Install コンポーネントプロシージャーを使用することで、「component Details」ページからインストールできます。デフォルトのコンポーネントの名前を次に示します。

- `WLDataSourceConfig` – データソースコンポーネント
- `WLTxDataSourceConfig` – トランザクションデータソースコンポーネント

データソースまたはトランザクションデータソースのインストール

このタイプのコンポーネントをインストールすると、インストールパスに基づいてファイルまたはディレクトリがファイルシステムにコピーされます。コピーが完了すれば、ファイルまたはディレクトリは WebLogic 管理サーバーに登録されます。

「component Details」ページにナビゲートし、Install コンポーネントプロシージャーを実行することで、データソースまたはトランザクションデータソースをインストールできます。

データソースまたはトランザクションデータソースをインストールする前には、次の変数を編集する必要があります。

- データソースまたはトランザクションデータソースの名前
- Java Naming and Directory Interface™ (JDNI™) の名前
- プール名

データソースまたはトランザクションデータソースのアンインストール

このタイプのコンポーネントをアンインストールすると、マスターサーバーからファイルまたはディレクトリが削除されます。

「component Details」ページにナビゲートし、Uninstall コンポーネントプロシージャーを実行することで、データソースまたはトランザクションデータソースをアンインストールできます。

接続プールのコンポーネントタイプ

接続プールのブラウズ

WebLogic 管理サーバーブラウザを使用すると、このブラウザから接続プールおよびその関連設定を選択できます。管理サーバーブラウザは、管理サーバー上のアプリケーションのアルファベット順リストを提供します。

WebLogic プラグインには、`WLJDBCConnectionPoolConfig` と呼ばれるデフォルトの接続プールコンポーネントも含まれています。このデフォルトコンポーネントにより、ブラウズの必要がなくなります。「Common Tasks」ページで「View All」を選択することにより、`/com/sun/webLogic8` フォルダ内のデフォルトのコンポーネントを検索できます。デフォルトのコンポーネントは、Default: Install コンポーネントプロシージャーを使用することで、「component Details」ページからインストールできます。

接続プールのインストール

このタイプのコンポーネントをインストールすると、インストールパスに基づいてファイルまたはディレクトリがファイルシステムにコピーされます。コピーが完了すれば、ファイルまたはディレクトリは WebLogic 管理サーバーに登録されます。

「component Details」ページにナビゲートし、Install コンポーネントプロシージャーを実行することにより、接続プールをインストールできます。

接続プールをインストールする前には、次の変数を編集する必要があります。

- プール名
- URL
- ドライバ
- データベース名
- ユーザー
- パスワード

接続プールのアンインストール

このタイプのコンポーネントをアンインストールすると、マスターサーバーからファイルまたはディレクトリが削除されます。

「component Details」ページにナビゲートし、Uninstall コンポーネントプロシージャーを実行することにより、接続プールをアンインストールできます。

マルチプールコンポーネントタイプ

マルチプールのブラウズ

WebLogic 管理サーバーブラウザを使用すると、このブラウザからマルチプールおよびその関連設定を選択できます。管理サーバーブラウザは、管理サーバー上のアプリケーションのアルファベット順リストを提供します。

WebLogic プラグインには、`WLJDBCMultiPoolConfig` と呼ばれるデフォルトの接続プールコンポーネントも含まれています。このデフォルトコンポーネントにより、ブラウズの必要がなくなります。「Common Tasks」ページで「View All」を選択することにより、`/com/sun/webLogic8` フォルダ内のデフォルトのコンポーネントを検索できます。デフォルトのコンポーネントは、Default: Install コンポーネントプロシージャーを使用することで、「component Details」ページからインストールできます。

マルチプールのインストール

このタイプのコンポーネントをインストールすると、インストールパスに基づいてファイルまたはディレクトリがファイルシステムにコピーされます。コピーが完了すれば、ファイルまたはディレクトリは WebLogic 管理サーバーに登録されます。

「component Details」ページにナビゲートし、Install コンポーネントプロシージャーを実行することにより、マルチプールをインストールできます。

マルチプールをインストールする前には、次の変数を編集する必要があります。

- マルチプール名
- アルゴリズムタイプ
- プールリスト – パイプで区切られた (|) 接続プールのリスト

マルチプールのアンインストール

このタイプのコンポーネントをアンインストールすると、マスターサーバーからファイルまたはディレクトリが削除されます。

「component Details」ページにナビゲートし、Uninstall コンポーネントプロシージャーを実行することにより、マルチプールをアンインストールできます。

スレッドプールコンポーネントタイプ

スレッドプールの構成

このタイプのコンポーネントをインストールすると、インストールパスに基づいてファイルまたはディレクトリがファイルシステムにコピーされます。コピーが完了すれば、ファイルまたはディレクトリは WebLogic 管理サーバーに登録されます。

「component Details」ページにナビゲートし、Install コンポーネントプロシージャーを実行することにより、スレッドプールをインストールできます。

プランのパラメータ変数設定を編集できます。

スレッドプールのアンインストール

このタイプのコンポーネントをアンインストールすると、マスターサーバーからファイルまたはディレクトリが削除されます。

「component Details」ページにナビゲートし、Uninstall コンポーネントプロシージャーを実行することにより、スレッドプールをアンインストールできます。

トランザクションサービスコンポーネントタイプ

トランザクションサービスの構成

このタイプのコンポーネントをインストールすると、インストールパスに基づいてファイルまたはディレクトリがファイルシステムにコピーされます。コピーが完了すれば、ファイルまたはディレクトリは WebLogic 管理サーバーに登録されます。

「component Details」ページにナビゲートし、Install コンポーネントプロシージャーを実行することにより、トランザクションサービスをインストールできます。

プランのパラメータ変数設定を編集できます。

トランザクションサービスのアンインストール

このタイプのコンポーネントをアンインストールすると、マスターサーバーからファイルまたはディレクトリが削除されます。

「component Details」ページにナビゲートし、Uninstall コンポーネントプロシージャーを実行することにより、トランザクションサービスをアンインストールできます。

JMS Server コンポーネントタイプ

JMS Server のブラウズ

WebLogic 管理サーバーブラウザを使用すると、このブラウザから JMS Server およびその関連設定を選択できます。管理サーバーブラウザは、管理サーバー上のアプリケーションのアルファベット順リストを提供します。

WebLogic プラグインには、`WLJMSServerConfig` と呼ばれるデフォルトの接続プールコンポーネントも含まれています。このデフォルトコンポーネントにより、ブラウズの必要がなくなります。「Common Tasks」ページで「View All」を選択することにより、`/com/sun/webLogic8` フォルダ内のデフォルトのコンポーネントを検索できます。デフォルトのコンポーネントは、Default: Install コンポーネントプロシージャーを使用することで、「component Details」ページからインストールできます。

JMS Server のインストール

このタイプのコンポーネントをインストールすると、インストールパスに基づいてファイルまたはディレクトリがファイルシステムにコピーされます。コピーが完了すれば、ファイルまたはディレクトリは WebLogic 管理サーバーに登録されます。

「component Details」ページにナビゲートし、Install コンポーネントプロシージャーを実行することにより、JMS Server をインストールできます。

JMS Server をインストールする前には、JMS Server の名前変数を編集する必要があります。

JMS Server のアンインストール

このタイプのコンポーネントをアンインストールすると、マスターサーバーからファイルまたはディレクトリが削除されます。

「component Details」ページにナビゲートし、Uninstall コンポーネントプロシージャーを実行することにより、JMS Server をアンインストールできます。

メールセッションコンポーネントタイプ

メールセッションのブラウズ

WebLogic 管理サーバーブラウザを使用すると、このブラウザからメールセッションおよびその関連設定を選択できます。管理サーバーブラウザは、管理サーバー上のアプリケーションのアルファベット順リストを提供します。

メールセッションのインストール

このタイプのコンポーネントをインストールすると、インストールパスに基づいてファイルまたはディレクトリがファイルシステムにコピーされます。コピーが完了すれば、ファイルまたはディレクトリは WebLogic 管理サーバーに登録されます。

「component Details」ページにナビゲートし、Install コンポーネントプロシージャーを実行することにより、メールセッションをインストールできます。

メールセッションをインストールする前には、次の変数を編集する必要があります。

- メールセッション名
- JNDI 名

メールセッションのアンインストール

このタイプのコンポーネントをアンインストールすると、マスターサーバーからファイルまたはディレクトリが削除されます。

「component Details」ページにナビゲートし、Uninstall コンポーネントプロシージャーを実行することにより、メールセッションをアンインストールできます。

CLI を使用した WebLogic の作業

プロビジョニングシステムを介して WebLogic で作業を行う場合、Sun N1 Service Provisioning System コマンド行と WebLogic コマンド行の 2 つのコマンド行を使用できます。

Sun N1 Service Provisioning System コマンド行インタフェースの使用法

デフォルトでは、プロビジョニングシステムのコマンド行インタフェースは次のディレクトリにあります。
`/opt/SUNWn1sps/N1_Service_Provisioning_system_5.1/cli/bin/cr_cli`

BEA WebLogic 8 プラグインオブジェクトは、`/com/sun/weblogic8` フォルダにあります。

ほかのカスタムコンポーネントやプランとほぼ同じように、プラグインコンポーネントやプランを操作できます。ただし、コンポーネントまたはプランに変更を加える場合、コンポーネントまたはプランを新しいフォルダに保存し、そのフォルダで変更を行う必要があります。プロビジョニングシステムのコマンド行インタフェースの使用法についての詳細は、『Sun N1 Service Provisioning System 5.1 コマンド行インタフェース(CLI) リファレンスマニュアル』の第 1 章「コマンド行インタフェースの使用」を参照してください。

WebLogic コマンド行インタフェースの使用法

WebLogic コマンド行は、「WebLogic 8 Common Task」ページからアクセスできます。WebLogic 8 コマンド行インタフェースの詳細は、BEA の Web サイトにある WebLogic Server Command Referenceを参照してください。

▼ Sun N1 Service Provisioning System を介して WebLogic コマンド行インタフェースを使用する

任意の管理サーバーまたは管理対象サーバーで WebLogic コマンドを実行できます。

手順

1. ブラウザインタフェースの「**Common Tasks**」セクションで「**WebLogic 8**」をクリックします。
2. 管理サーバーと管理対象サーバーのどちらでコマンドを実行するかを選択します。
   - 管理サーバーでコマンドを実行する場合は、「**Domain Management: Start**」をクリックします。
   - 管理対象サーバーでコマンドを実行する場合は、「**Application Server Management: Start**」をクリックします。

   「component Details」ページが表示されます。
3. 「**`Run-cli`**」コンポーネントプロシージャーを選択し、「**Run**」をクリックします。
   プランの「Run」ページが表示されます。

4. **CLI** を実行する **AdminServer** 仮想ホストまたは管理対象サーバー仮想ホストを選択し、「**Run Selected Installations**」をクリックします。

5. プラン変数のフィールドに必要な情報を入力します。

   多くのプラン変数には情報が必要ないため、空白のままにしておくことができます。次の表で、オプション変数を説明します。

   コマンドの SSL 引数
   : サーバーへの接続に SSL を使用しない場合、この変数は無視しても構いません。

   コマンドのターゲットを表示または修正する適切なアクセス権が必要なユーザーの名前
   : これはユーザー名の変数です。ユーザー名とパスワードの変数は、 ユーザー構成ファイルおよびキーファイル変数と相互に排他的です。ユーザー名およびパスワードと、ユーザー構成ファイルおよびキーファイル位置のどちらかを指定します。

   ユーザー名と関連付けられたパスワード
   : これらはパスワード変数です。ユーザー名とパスワードの変数は、 ユーザー構成ファイルおよびキーファイル変数と相互に排他的です。ユーザー名およびパスワードと、ユーザー構成ファイルおよびキーファイル位置のどちらかを指定します。

   暗号化されたユーザー名とパスワードが含まれる、ユーザー構成ファイルの名前と位置
   : これはユーザー構成ファイル変数です。ユーザー名とパスワードの変数は、ユーザー構成ファイルおよびキーファイル変数と相互に排他的です。ユーザー名およびパスワードと、ユーザー構成ファイルおよびキーファイル位置のどちらかを指定します。

   キーファイルの名前と位置
   : これはキーファイル変数です。ユーザー名とパスワードの変数は、 ユーザー構成ファイルおよびキーファイル変数と相互に排他的です。ユーザー名およびパスワードと、ユーザー構成ファイルおよびキーファイル位置のどちらかを指定します。

6. 「**Run Plan (includes preflight)**」をクリックします。

例 4–1 コマンド行インタフェースの使用法

次の例では WebLogic `FORCESHUTDOWN` コマンドを使用して、各 `Run-cli` プラン変数の入力を説明します。

実行する Weblogic CLI (weblogic.Admin または　weblogic.Admin は weblogic.Deployer):

コマンドの SSL 引数:

コマンドを実行するサーバーインスタンスの待機アドレス:	sun03 「これは AdminServer の名前です。」
コマンドを実行するサーバーインスタンスの待機ポート:	7001
コマンドのターゲットを表示または修正する適切なアクセス権が必要なユーザーの名前:	admin
ユーザー名と関連付けられたパスワード:	xxxxx
暗号化されたユーザー名とパスワードが含まれる、ユーザー構成ファイルの名前と位置:	
キーファイルの名前と位置:	
実行するコマンドの名前:	FORCESHUTDOWN
コマンドの引数:	Server-one

Sun N1 Service Provisioning System 内での WebLogic Server Scripting Tool の使用法

プロビジョニングシステムのブラウザインタフェースからは WebLogic Server Scripting Tool (WLST) を使用できます。WLST を使用して管理タスクと構成変更を行う方法の詳細は、BEA の WebLogic Server の Using the WebLogic Server Scripting Tool (`http://dev.bea.com/codelibrary/code/wlst.jsp`) ドキュメントを参照してください。

▼ WebLogic スクリプトコンポーネントを作成する

まず WebLogic スクリプトコンポーネントを作成してから、それをインストールする必要があります。

手順

1. ブラウザインタフェースの「**Common Tasks**」セクションで「**WebLogic 8**」をクリックします。
2. 「**Command Line Interface: Create**」リンクをクリックします。
   コンポーネントの「Edit」ページが表示されます。
3. 新しい **WebLogic** スクリプトコンポーネントの名前を入力します。
4. **(**省略可能**)** コンポーネントのラベルと説明を入力します。
5. ファイルシステム上の **WebLogic** スクリプトファイルのコピーがあるホストを選択します。

6. ホストのファイルシステムをナビゲートし、ファイルを選択します。
7. 「**Check In Selected Item**」をクリックします。
   コンポーネントの「Check In」ページが表示されます。
8. 編集アクセス権を持っているフォルダを選択します。
9. 「**Continue to Check In**」をクリックします。

▼ WebLogic スクリプトコンポーネントをインストールする

始める前に　WebLogic スクリプトコンポーネントをインストールするには、プロビジョニングシステム内にスクリプトコンポーネントが存在する必要があります。63 ページの「WebLogic スクリプトコンポーネントを作成する」を参照してください。

手順
1. ブラウザインタフェースの「**Common Tasks**」セクションで「**WebLogic 8**」をクリックします。
2. 「**Command Line Interface: View All**」リンクをクリックします。
   「Components」ページが表示されます。
3. インストールする **WLScript** コンポーネントの行で「**Details**」をクリックします。
   コンポーネントの「Details」ページが表示されます。
4. 「**Component Procedures**」テーブルで「**Default: Install**」プロシージャーを選択し、「**Run**」をクリックします。
   プランの「Run」ページが表示されます。
5. ターゲットホストを選択します。
   AdminServer の仮想ホストをターゲットにします。

   注 – ライセンスのインストール用にコンポーネント変数を変更する必要はありません。
   ---

6. **(**省略可能**)** ソフトウェアをインストールした **WebLogic** ユーザーの名前をを「**RunAs**」フィールドに入力します。
   このユーザーは、ソフトウェアインストールプランで使用される `webLogicUser` 変数によって表されます。
7. 「**Run Plan (includes preflight)**」をクリックします。

プランの使用法

WebLogic 8 プラグインは、管理サーバー、管理対象サーバー、およびクラスタのインストールと削除に関連する数多くのタスクの実行を、プランに依存しています。

BEA WebLogic 8 プラグインのプランは /com/sun/weblogic8 フォルダにあり、「Common Tasks」ページからリンクされています。

障害追跡

プロビジョニングソフトウェアを介して WebLogic を管理する際に問題が発生した場合、通常は画面にメッセージが表示され、問題が存在することが通知されます。

```
Problems encountered during plan run or preflight
The plan (or preflight) "/com/sun/weblogic8/InstallAdminServerPlan"
finished with 1 failed host(s). (017034)
Unable to find session variable "WL_DEFAULT_PASSWORD" (Unresolved
session variable WL_DEFAULT_PASSWORD. This session variable was
automatically created when the system was unable to find it.).
Add this session variable and try the operation again. (040111)
```

この例のメッセージは理解しやすいものですが、すべてのメッセージがこのように分かりやすいものとは限りません。

次のメッセージは、管理サーバー上の JMX インタフェースが使用不可能であったか、ログイン情報が正しくないことを意味しています。

```
Admin Server adminHost JMX interface
 running on port portNumber is not available;
Admin Server must be running for this operation.
```

特定の問題に関する詳細な情報を調べるには、最終的なエラーブロックに到達するまで「Run History Details」リンクをたどります。エラー状態の詳細については、stderr および stdout の出力を表示します。

WebLogic のインストールのエラーメッセージの例

この節では、WebLogic のインストール時に表示される可能性があるエラーメッセージの例を示します。

例 **4–2** 不正なユーザーのメッセージ

```
The user specified is not a valid system users: weblogic (017056)
```

例 **4–2** 不正なユーザーのメッセージ　*(続き)*

システムユーザー「weblogic」を作成するか、Install 変数 `weblogicUser` を既存のユーザーに変更する必要があります。

例 **4–3** ターゲットホストのエラーメッセージ

```
Specified target(s) "sol01" were not in the required host set
 "com.sun.weblogic8#SupportedHS". (017087)
```

このエラーメッセージには 2 つの原因が考えられます。

- ホストは、プラグインと互換性があるオペレーティングシステムをサポートしていない。

  この場合は、プラグインによりサポートされているオペレーティングシステムを使用するホストを選択します。
- ホストの準備ができていない。

  この場合は、「Hosts」ページにアクセスし、ホストの準備を行います。

例 **4–4** 起動ステップでのエラーメッセージ

```
Error: Installation could not be preformed check the deployment details
 for more information.
```

最終的な `execNative` コントロールの配備の詳細をチェックし、WebLogic インストーラからの情報を調べる必要があります。

次のメッセージは、`stdout` の出力に含まれている可能性があるメッセージの例です。

- SilentBEAHomeTask – Access to the directory is denied: [/usr/local/bea]

  このメッセージが表示された場合、インストールプランで指定されている WebLogic ユーザーは、`beaHome` ディレクトリの作成アクセス権または書き込みアクセス権を持っていません。ディレクトリのアクセス権を変更するか、プロビジョニングシステムのディレクトリコンポーネントを使用して `beaHome` ディレクトリを作成する方法があります。
- SilentBEAHomeTask – At least one item must be selected.

  このメッセージが表示された場合、WebLogic のインストールがすでにこのパスに存在しています。パスを変更するか、既存の WebLogic インストールをアンインストールする必要があります。

索引

E

EAR,「エンタープライズアプリケーション」を参照
EJB
　コンポーネントタイプ，54-55
　取得，49
EJB の取得，49

J

JAR ファイル
　アンインストール，54
　インストール，54
　コンポーネントタイプ，54-55
　取得，49
JAR ファイルの取得，49
Java アーカイブ,「JAR ファイル」を参照
JMS Server
　アンインストール，59-60
　インストール，59
　コンポーネントタイプ，59-60

W

WebLogic コマンド行インタフェース，61-63
WebLogic ソフトウェア, インストール，21-23
Web アプリケーション
　アンインストール，53
　インストール，53
　コンポーネントタイプ，52-54
　取得，48-49
Web アプリケーションの取得，48-49

あ

アクセス, 古いコンポーネント，24
アップグレード, 注意事項，23-24
アンインストール
　JAR ファイル，54
　JMS Server，59-60
　Web アプリケーション，53
　エンタープライズアプリケーション，52
　接続プール，57
　データソース，56
　トランザクションサービス，58, 59
　マルチプール，58
　メールセッション，60

い

インストール
　JAR ファイル，54
　JMS Server，59
　WebLogic ソフトウェア，21-23
　Web アプリケーション，53
　エンタープライズアプリケーション，51
　接続プール，56-57
　データソース，55-56
　マルチプール，57-58
　メールセッション，60

え
エンタープライズアプリケーション
　アンインストール，52
　インストール，51
　コンポーネントタイプ，51-52
　取得，47-48
エンタープライズアプリケーションの取
　得，47-48

か
管理サーバー, 削除，40-41

き
起動, クラスタ，42

く
クラスタ
　起動，42
　削除，42-43
　停止，42
　離脱，43-44
クラスタメンバー, 削除，43-44

け
検出，「アクセス」を参照

こ
構成
　トランザクションサービス，58
コマンド行インタフェース, WebLogic，61-63
コンポーネント, アクセス，24
コンポーネントタイプ
　EJB，54-55
　JAR ファイル，54-55
　JMS Server，59-60
　Web アプリケーション，52-54
　エンタープライズアプリケーション，51-52
　接続プール，56-57
コンポーネントタイプ (続き)
　データソース，55-56
　トランザクションサービス，58
　トランザクションデータソース，55-56
　マルチプール，57-58
　メールセッション，60

さ
削除
　「削除」を参照
　管理サーバー，40-41
　クラスタ，42-43
　クラスタメンバー，43-44
　ドメイン，40-41

し
使用, プラン，65
障害追跡, 説明，65-66

せ
接続プール
　アンインストール，57
　インストール，56-57
　コンポーネントタイプ，56-57

て
停止, クラスタ，42
データソース
　アンインストール，56
　インストール，55-56
　コンポーネントタイプ，55-56

と
ドメイン, 削除，40-41
トランザクションサービス
　アンインストール，58, 59
　構成，58
　コンポーネントタイプ，58

トランザクションデータソース, コンポーネン
　トタイプ，55-56

は

配備サーバーの要件，14-15

ふ

プラグイン
　インポート，20-23
　内容，13-14
　配備サーバーの要件，14-15
プラグインのインポート，20-23
プラグインファイル
　インポート，20-23
　場所，19
プラン, 使用，65

ま

マルチプール
　アンインストール，58
　インストール，57-58
　コンポーネントタイプ，57-58

め

メールセッション
　アンインストール，60
　インストール，60
　コンポーネントタイプ，60

り

離脱, クラスタ，43-44